伝説の超日本人一夏君

A.K

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第二回モンドログロッソにて拉致られた織斑一夏君
拉致後に彼はとある施設にて体を弄られた。
その結果、彼は変わり果てた姿となった！
金剛力士の様な体付き
力を解放すると巨大化
髪が緑色に染まり逆立つ
気を操り空を飛ぶ
サイヤの本能のままに行動する

ついたあだ名は『最強の悪魔』

目次

第1話 ―― 1
第2話 ―― 9
伝説の超日本人一夏君第3話 ―― 18
伝説の超一夏君第4話 ―― 28
伝説の超日本人一夏君5話 ―― 39
伝説の超日本人一夏君6話 ―― 50
伝説の超一夏君7話 ―― 67
伝説の超日本人一夏君第8話 ―― 80
伝説の超日本人一夏君9話 ―― 101
伝説の超日本人一夏君10話 ―― 129
伝説の超日本人一夏君11話 ―― 144

第1話

俺は昔、身体を弄られた。

事の発端は俺の姉――――織斑千冬がやってたＩＳというパワードスーツを使ってのでは……　なんちゃら世界大会という所まで応援（ほぼ無理矢理）に行った時の事だ。

会場に着く直前、唐突に俺が乗っていた車（何やらＶＩＰ専用車とかなんとか）が数人の武装した奴等に襲撃された。平和な日本で過ごして来ていた学生如きが、武装した奴等に勝てる訳もなく拉致られた。

数時間後、俺は良く分からない廃工場に居た。何やら話していたのだが、外国語なんて分かるわけ無かった。生憎手足は縛られ、何も出来ないのでボーッとしてたら頭に鈍い痛みが響く。それと共に意識を手放し、目が覚めたらまた違う場所に俺は居た。

俺が居たのは何処かの研究施設の様な白い部屋。俺は相変わらず体を椅子かなにかに固定されてた。

俺の姉である織斑千冬は日本中で人気がある人だ。文武両道（家事はできない）を成し、その容姿も美人と呼べる者。やはりＩＳの扱いが凄く、前やったＩＳの世界大会で

優勝。凄いことは認めるのだが、大会で優勝したあとぐらいから辺りの奴らは姉と俺を比較し始めた。

俺は至って普通の男で、姉は何をやっても（家事は例外）凄いので比較されてもしょうが無い。しかし、それの影響で……　イジメが始まった。まあそれがどうしたって事なんだがな。もともと俺と姉は仲はあまりよくなかった。家事以外何でもこなす故に『気持ち悪かった』というのが一番だった。だから俺は姉を避けていたのに、姉はベタベタと鬱陶しい。

それからだった。俺は体中を弄りに弄られた。良く分からない手術を受けさせられ、終わる毎に普通の人が持つことが無い超常的な力が俺の体に宿る。痛かったけど、何回か後に痛覚を無くした為苦になることは無かったが、手術はどんどん進んだ。手術は拉致されて数年間、一定周期に行われた。

身体能力の超異常進化
体から過剰に湧き上がる謎の力
その力による浮遊能力

数年間掛け手術を受けさせられ手に入れた能力と言えばこれぐらいだ。手術によって得た能力の影響か、当時１７０ｃｍだった身長は急成長し２００ｃｍまで伸びていた。（何故だ）　元々鍛えていた為それなりに付いていた筋肉は、まるで金剛石の様な硬さを持った筋肉となり、戦うためだけの筋肉付きとなった。（筋肉ムキムキ過ぎだろ）

このせいで、俺がきれる服は無く上半身だけ裸。しまいには髪の毛なんかも切らせてくれなくて腰付近まで伸びてボサボサだ。

声も以前と全く別人のような声で、それは毎週日曜午後六時から放送される国民的某アニメの主人公のお爺ちゃんの声とほぼ同じ声だ。

体から湧き上がる謎の力、研究者の中に日本人が居てこの力について教えてくれた。謎の力、それは――――『気』と呼ばれる物だった。

最初それを知った時『はっ？』と、自室代わりだった監禁部屋越しに呟いたのは懐かしい。気というのは古くから体中を巡回する生命エネルギーらしき物だったと思う。さらに研究者が言うには、今いる施設は『人間の体の能力を全て、考えられない程に解放する』ことが目的との事だった。

何故俺がそんな研究の試験体となったのかと聞くと、研究者は自慢げに『君があの織斑千冬の弟だったから』と言われた。

はっ？

俺はそれを聞いた瞬間、人生で初めて心の底からブチ切れた。それと共に、湧き上がる力――――気がさらに湧き上がった。長期に渡って切っていなかった髪の毛は、物理的法則を無視し逆立つ。

「ぬおおぉぉぉ……　!!」

こんな力を手に入れたのも、嫌いである姉のせいかと思うと腹立たしい。そんな事を思いながら叫ぶと、体から……　緑色のフレアが放たれる。ただでさえ力が解放され

たと思っていた体が『まだキツイ』と言わんばかりに、体が微妙に膨れ上がり始める。
目の前に居た研究者は、悲鳴を上げながら何処かへ走り去りながら『ば、化物ォォーーーッ!?』とか言ってるがどうでもいい。体が、脳が『力を解放しろ』と促す。俺はそのまま湧き上がる気を全て解放した。

「ンンンンン……　ンンンーーーッ!!」

ズドオォォオン！

「はぁ……　はぁ。気が高まる、溢れるゥ！」

気を解放した後、何故か高くなった視点が更に高くなった……　が、そんなことはどうでもいい。今はこの怒りをこの施設にぶちまけてやる。髪の毛も緑色になってるのもどうでもいい。
俺は浮遊能力が発現した時から、飛ぶ練習はしていた。慣れている故にいつもと同じ様に飛んだら、天井に頭をぶつけ――――そのまま施設の屋上まで突き抜けた。
施設の上空数百メートル付近まで上った時、周りを見渡す。あるのは２ｋｍ程先に軍

事施設らしき施設があるだけだ。どうやら黒いＩＳが動き回ってるようだが関係ない話だ。

「千冬姉ぇ……　!!」

俺は慣れたように右手に気を込める。何故そうしたかは分からなかったが、本能的にそうした。一瞬の光と共に右手にボーリング玉ほどの緑色の光球が形成された。

「あんのバッカヤロォォーーッ!」

右手の光球を真下にある施設に向けてぶん投げ、光球は施設にぶつかると大爆発を起こして光のドームを形成する。

光のドームが消えると、施設は跡形も無く消え去っていた。俺はそれに満足する……　が、ここで緊急事態が起きた。眠気だ。何日も手術（麻酔無し）をぶっ続けで行ったせいで寝てなかった。それが今ここで襲い掛かってきた。

眠気には勝てんなと思い、そのまま一夏の意識は遠のく。それと共に浮遊能力も消

え、一夏は光のドーム直撃中央部に落ちた。

「これは酷い……」

銀髪で左目に眼帯をした少女が、一夏の攻撃で無残になった施設跡を見て呟く。その身にはドイツ産第三世代型ＩＳ【シュヴァルツェア・レーゲン】を纏っていた。そしてそのＩＳを纏う者の名は『ラウラ・ボーデヴィッヒ』という少女だ。彼女はまだ少女とも呼べる歳で軍人であり、少佐なのだ。

ラウラは基地から２ｋｍ程離れた所から突然起きた謎の爆発を見て、基地司令官より特別任務を受けてここまで来た。見渡す限り更地だが、爆心地と思われる場所に人が倒れてるのを発見し飛翔する。

「男……　それも１人か？見るからに東洋人か」

見るからに無傷であるのが不思議だが、ラウラはとりあえず基地に通信を入れる。

『こちらラウラ・ボーデヴィッヒ少佐。
　爆心地にて東洋人の男を発見した。』
『こちら管制室、了解した。
　少佐、他に何かあったか？』
『見た所何も無い。せいぜいこの東洋人の男がいた事ぐらいだ。』
『了解。とりあえず織斑特別教官にも伝えておく。
　東洋人の男を少佐は運んで来てくれ。』

　ラウラはそれに対して了解と言うと通信を切った。ラウラはこの男が何故あんな爆発があった所にいるのか、何故そんなところで無傷でいるのかを考えながら抱える。身長が低いラウラは、自分より背が大きいこの男を抱える事に何故か興奮した。
　数分後、ラウラは男……　一夏を抱えながら軍事施設『ドイツＩＳ防衛特殊部隊基地』に帰投した。

第2話

目が覚めた。

己が目覚めたことを理解する。それと共にすぐ様バイタルチェックと周辺に敵が居ないかチェックを開始する。これも数年間の施設での訓練で身に付けたものだ。

今己がまた何処かの施設に居ることを理解、己はベッドらしき物に鎖かなにかで拘束されている。手や足も同様に肌触りからして金属製の物で拘束されていた。と言うことは……　またもや監禁室らしき部屋に居るのでは?と一夏は考えた。そうとなると脱出するべし

「ん……　動きづらいな、これ」

一夏は拘束具を簡単に引きちぎり、全身を伸ばす。息をするかのように軽く気を放出する。それによって部屋の壁にヒビが、部屋の出入口と思われる扉が吹っ飛んだ。今の一夏の身体面が超常的な領域になってるのもそうだが、無限に溢れかえる気が更にタチ悪い。

極稀に気を扱う者もいるが、その扱える者はほんの僅かな気しか扱えない。それに気は使えば減るのが当たり前だ。そんな前提を覆しているのが今の一夏だ。減るどころか溢れかえる始末とはもぅなにこの化m（ポーヒー）……　ドワァァァァァァァァァァァァァ!?

「んんん……　千冬ッㇳォォ!!」

ギュピギュピと、独特な足音を鳴らしながら部屋から出た。無論この時点でサイレンが鳴り響き、この施設内に居る人々が慌ただしく動いていた。一夏はそれを知らんとばかりにゆっくりと歩いていく。一夏は進む。壁が目の前に有ろうが、鋼鉄製の扉があろうが歩いてぶち壊す……　後にこの光景は『悪魔前進』と呼ばれるようになった。

独特な足音を鳴らし、歩いて施設の外に出た。俺は体に付いていた壁や扉の破片を払い、辺りを見回す。視界には黒いＩＳが数機、それと何故か己の姉が居た――――黒いＩＳ数機の前に立って。

姉は俺が弟だと理解しているのか、単純にありえない光景を見てるのか呆然としている。そんな事より、俺は今やるべき事がある。

「千冬ットオオ……！」

口がかって動く。何故か『ット』と付けて喋ってしまう。それでも俺は……真っ直ぐ千冬姉に向けて全力疾走する。腕は全力で振り、太ももを高く上げ地面を思いっきり蹴る理想的な走りだ。黒いＩＳが千冬姉を囲む様にフォーメーションをとり、千冬姉から俺を遠ざけようとする。通常この世界において最強と呼ばれるパワードスーツ『Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｓｔｒａｔｏｓ』――――通称『ＩＳ』に向けて、この様な事をするのは自爆行為だ。しかし、今の俺には何故か出来る気がした。だから躊躇無く蹴り上げた。

『『『クソマァ!?』』』

ポーヒー

『『『サラダバー!?』』』

デデーン☆

蹴りあげたＩＳを纏っていた連中に、軽く練った極大気弾をぶち当てた。そのまま上空で爆発を起こし、ＩＳを纏っていた連中は髪の毛がアフロヘアーになってふらふらしながら落ちてきたが無視。なぜアフロなのかは無☆視（ハァ☆）

この光景に呆然としている千冬姉を庇うかのように立つ、黒いＩＳを纏う銀髪の少女に向けてラリアットを喰らわす。

「ふおぉぉ!?」

そのまま気で空を飛ぶ術……　名付けて『舞空術』で、いつの間にか近くにあった『岩盤』に叩きつける。ＩＳごとめり込んだ少女は気絶、ナムサン！

「一夏、一夏なのだな！」

一夏はこの岩盤が何処から出て来たのか、黒いＩＳを纏う少女を更に岩盤にめり込ませながら考えていたらそんな声が聞こえた。

「会いたかったぞォォォ！」

俺が襲いかかろうとしたのに、何故か近付いてきた。ここで説明しておくが、俺は姉の事を嫌っているが姉は俺の事が大好きなのである。もうベタベタと鬱陶しい……このことは以前言ったが、姉は極稀に性的な意味で襲い掛かって来る。以前あったのが小学6年の夏の頃で、その時何故か近所にある『篠ノ之神社』を経営する篠ノ之家の長女兼天才の束さんに助けてもらった為助かった。

それ以来、束さんは何かと俺の事を気にかけてくれる。その為か実の姉より姉らしい束さんの事が俺は好きだ。

「来るなァ！」

「ｄｏｏｒ!?」

全力疾走でやってくる姉を殴り抜く。姉はバウンドしながらまた近くに出現した岩盤にめり込んだ。さっきからなんだこの岩盤は?

「はあはあ……　私は助かった」

昔から全力で攻撃しても何故か大したダメージを与えられない。普通に痛いと思われる攻撃をしても、笑ってるだけだった姉。まあ……　伊達に世界最強、この体になる前から人外能力値を持つだけの人間だけはある。

「さ、流石我が弟……　腐☆腐」
「しぶとい姉とはこういう事か」

もはやコントのようなやり取りに、いつの間にか復活していた黒いＩＳを纏う銀髪の少女がポカンとしながら俺と姉を見ていた。

恐らく現在の姉の行動を見ての反応だろう。何時もは本当に冷静で、キリッとして常識人な姉。しかし、俺がいると常時この様な状態になるのである。その変な状態を初めて見た結果がこの銀髪の少女の様なことが起きたのだろう。その時、バァンと銃音が鳴り響く。どうやら胸部に当たった様だな。

姉はこれを見て「攻撃中止！攻撃中止！」と通信機を取り出し、何回も叫ぶ。俺は着弾してペチャンコになった銃弾をコネ、今撃った奴が居るだろう方角に向けて丸くなった弾丸を全力のデコピンで撃ち返す。バゴンという音と共に「ぎゃああ!?」という悲鳴が響く。

その直後、多方面から射撃が開始される。姉はＩＳを纏った銀髪の少女に連れられて既に俺から離れていた。普通の人間ならミンチ確定の攻撃だ。幾ら姉だろうがこれには無理だ――――が、俺はもう既にそんな事は無い。多少ビシビシと痛い程度で、頭に当たっても小石をぶつけられたぐらいの衝撃だ。しかし、これは流石に鬱陶しい……更に勢いが増したので怒った。

「落ちろカトンボ！」

一夏は気を解放し、緑色のフレアを放ち髪が逆立つ。それだけで周囲は暴風が吹き荒れ、地面が揺れて大気が震える。一夏は右手に小さな気弾を複数作り、それを勢い良く全方位に向けて投げる。飛ばされた小さな気弾は着弾と共に大爆発を起こし、基地を根こそぎ破壊し尽くす。

「き、基地が……　ここまで破壊されてしまった。

最早何もかもお終いだァ」

哀れこの基地の司令官。

一夏は己がこの光景を見て気分が良くなっていくことに気付く。だからもう1度同じ事をやる。それにより更に基地は破壊され、爆炎に包まれる。やがて爆発が収まると――――基地は何事も無かったように惨劇前の綺麗な状態になっていた。

「ハア☆」

それに対してこの場にいた多くの人間が『訳が分からないＹＯ☆』と項垂れる。しかし、一夏は相変わらずのように愉悦に浸かっている。銀髪の少女は『これがジャパニーズ・ギャグ補正という奴か！』と、何故か狼狽える千冬の隣で感動していた。

「ふふふ……　ふっははは！」

「あ、悪夢たん……」

誰かが言った。俺を悪魔だと……　愉悦なり。これもあの施設にいた科学者達が言っていた『細胞』の影響なのだろう。

この後、また腹が減って気絶した。俺は悟ったのだ、腹が減っては何も出来ないことを。そして、姉が気絶する直前に襲い掛かってきた（性的な意味で）。なので気弾を喰ら

わせ空の彼方に吹き飛ばした。
　一夏が気絶した後すぐ様空の彼方から戻って来たが、何処からともなく湧いた赤い髪に青い肌をしたマッチョマンに再び空の彼方へ吹き飛ばされた千冬であった。
「わあぁぁぁぁぁぁぁ…………!?」
「きよ、教官がぁぁ!?教官そのものがアアア!?」
　この光景を銀髪の少女はただ見てるしかなかった。

伝説の超日本人一夏君第３話

俺はそれを見た。
廃墟となった街と思われる所

「勝てるはずが無い……
奴は伝説の超サイヤ人なんだぞ!?」

その存在に本能故に怯える。
しかし、誇りの為に戦った戦士

「オレがサイヤ人の王子ベジータだ!」

荒野のような石ばかりの所
巨大な岩盤
そして、そこで戦う複数の人間の中でも一際目立つ存在に目を奪われた。

「ブロリー……　おらオメェをぜってえ許さねぇぇ!!」

橙色の武闘着を着て、ボロボロになりながらも戦う一人の金髪の超戦士

そして

「馬鹿なァァァァァ!?」

ブロリーと呼ばれる人物を見た。

すると、突然辺りが暗くなりなんだと思っていたら爆風が俺を襲う。同時に、圧倒的……　否ッ!!絶対強者故の圧力と気が目の前に現れる。

溢れ出る絶大なる緑色の気

その肉体はまさに力でねじ伏せる為に

その目は完全に白目

「貴様がオレの細胞を埋め込まれた奴か」

アンタは――――――――――――

目が覚めた。何か重大な事を忘れてる様だが、まずは周囲確認。
見覚えのある天井だ……　よし、壊す（この間２．６秒）

「イチリィィィ！」
「ヘアッ!?」

どうにも見覚えのある天井とその部屋を見て、直ぐに破壊しようとした一夏。しかし、そこへ鋼鉄製のドアをただの前進でぶち壊して千冬が入って来た。一夏はすぐ様横たわっていたベッドから立ち上がり、懇親の一撃である右ストレートを放つ。千冬はそれを右手で軽く払い「甘いぞ！」と叫ぶが、一夏の左手には緑色の気弾がチャージされていた。

「クソマァ!?」

下から上へとすくい上げるように投げた気弾は見事千冬の腹にヒットし、気弾の勢いに負けた千冬は部屋の天井を突き破り基地の天井をすべてぶち抜いた。そして、そのまま基地外へと押しのけられるように消え去った

――――と、思っていた一夏の姿はお笑いだったな。」

「さ、流石は千冬ットと褒めたいところだァ……！」

千冬について来ていた銀髪の少女は、その様子を見て生まれたばかりの子鹿のように

震えていた。少女の目線からは、己の上官がその弟に鋼鉄製のドアを前進だけでぶち破る事を見せつけられ、瞬時に弟の攻撃で部屋から打ち上げられた。しまいには弟の背後に突然出現するという大惨事で、普通の人間なら正しい反応の一つだ。

「またあったな小娘ェ」

「一夏にはまだ教えて無かったな……

ボーデヴィッヒ、名乗れ」

大体自分の前では巫山戯てる姉の真面目な姿に、俺は違和感を覚えた。いや、俺の前だと巫山戯てるのが普通だからか……？

そんな一夏を他所に先程の小娘……ボーデヴィッヒが姿勢を正す。

「私はドイツＩＳ特別部隊『黒ウサギ』隊長のラウラ・ボーデヴィッヒ少佐です」

「俺は織斑一夏、お前が言う教官の弟だ」

一夏はそう言うと右手を差し出し、何の意味を刺すのか理解したラウラも右手を差し

出して握手する。巨大な一夏の手と小柄なラウラの手では差があり過ぎて、傍から見れば一夏がラウラの手を握りつぶしてるように見えるだろう。

◆

「ＩＳ部隊の教官だァ?」

あれから数刻、基地の食堂にて一夏はそう呟いた。

「ああ。数年前、お前が攫われた時に捜索に協力して頂いたお礼だ。」

「ふーん……　あっ、これおかわり」

「なあ一夏、お前そんなに食う奴だったか?」

その光景を興味本位で見に来ていた隊員達（男女５０人程）が、なんて奴だと思いながら見ている。一夏の座っているテーブルには食い終わった皿の山が並んでいる、その数既に３０皿。

変態状態な姉では無いので、一夏はこうなった理由を普通に話すことにした。

「こんな身体のせいだ。俺を攫った奴らが体を馬鹿みたいに改造し、成長しきった姿が今の俺だ千冬ット。
更に、この体は燃費が悪くこのぐらい食べなければ調子が悪くなるからなァ」

千冬はその話を聞いて、先日見たあの力について問いた。一夏はそれに対して
「体内エネルギー……　言わゆる『気』だ」　と話した。
「『気』だと?それはあの中国やらで言われてる……　人が持つ体内を循環するエネルギー体の事か?」

それに対して千冬の横に座るラウラがそう言う。

「そもそもだ。俺を攫った奴らの目的は『人体の限界以上の力を引き出す』研究であり、その成功体が俺という訳だ。
だが、奴らの誤算は俺が奴らの想定を遥かに超えたバケモノに昇華した事か……
だから今俺がここにいる訳だがな。」

それに本気出せばＩ日で世界征服なんて夢じゃねえ――――っと、真面目な表情で言う。それはここにいる人員が良く分かっていることだ。

ＩＳが数機あれば国さえ滅ぼせると言われている程、ＩＳというのは高い戦闘力を持つのだ。だからこそ今や『ＩＳにはＩＳしか勝てない』という言葉も生まれた訳だ……　しかし、そんなＩＳを千冬も圧倒とは行かないが生身で対抗する事は出来る。だが一夏はそれすら超越し、簡単にＩＳを無力化してしまったのだ。その時点で『ＩＳはＩＳのみ倒せる』という『ＩＳ絶対神話』その常識を覆したのだ。

「ふう……　食った。ごちそうさま」

そう言って一夏は首を鳴らしながら立ち上がる。そして「体を動かす」と言って食堂から出る。それに我も我もと続いて行くように人々がその後に続いて、千冬とラウラもその後を追った。

この時、食房の方から『食糧がほぼ無いだと?もうダメだ…おしまいだぁ…』と言う声が聞こえて来ていたのは誰にも聞こえなかった。

「……　っ、五月蝿いな」

一夏は食堂から出た後、すれ違った女性士官に体を動かせる所を聞いた。その結果、先日ＩＳを蹴り上げた屋外戦闘訓練上にその足を運んだ。無論、周りには先程もいたこの基地の人々が居る。

そんな人々の中から、一人の女性が跳躍して一夏の前に降り立つ。その人物は千冬であった。

「一夏、暴れ過ぎるなよ？」

姉としての一言だ。だが、それが寧ろ一夏の怒りに触れたのか自然に気が辺りに放出される。特に近くに居た千冬は思わず吹き飛ばされたが、直ぐに地面に着地する。

「……　考慮する」

目を閉じる。思い浮かべるは爆発――――瞬間、体から膨大な量の気が湧き上がる。

この後、一夏の動きを見た者達は口を揃えて言う。

悪魔のような武神がいる――――っと

伝説の超一夏君第４話

「ＩＳ適正だァ?」

あれから暫く時が経ち季節は秋を過ぎ、冬の終わりと春間近の季節。言うなれば三月の末だ。本来一夏は既に日本に帰国している予定だったのだが、公には一夏は死亡扱いされている。死んだと思われていた者の確認……　それが世界的有名な人物の身内となればまた面倒臭い問題が出て来る。さらに、本人の生存が確認され過去にあった問題が色々と浮上して政府は今対応に追われている。

現在千冬はこの基地での教官としての任務を全うし、ＩＳ学園と呼ばれるＩＳを学ぶ女子高に教師として働いている。もともとＩＳは女性にしか反応しない為、女子高なのは当たり前なのだ。

そういう事があり、一夏は今もこうしてこの基地に滞在し、色々とお世話になっている。

「ああ。一夏が初めてＩＳを吹き飛ばした時、ＩＳに接触した時にＩＳ適正があること

が分かってた。だが、公にその情報が流れれば大混乱だ。その為、私を含めたこの基地以外情報を漏らさないようにしていた。
　しかし、何処からか分からんがその事がＩＳ委員会に漏れた。」
「これについてはこの基地以外の場所からの犯行と思われていて今も尚調査中です。」

　一夏は基地内部にある休憩室でラウラと『黒兎隊』副隊長であるクラリッサから話があると言われ、入ってすぐ話した内容に一夏は怪訝に思っていた。

「その流れじゃあのＩＳ学園とやらにぶち込まれそうだが？」
「単刀直入に言うとその通りだ。
　先日、ＩＳ委員会と司令官から来年から一夏はＩＳ学園に通う様に指令が出た。そして、その護衛で私がＩＳ学園に行く事になった。
　なお、私がＩＳ学園に行っている間の代理隊長はクラリッサに任す。」
「ＩＳ学園か。千冬ツトには悪いが、オレは彼処に対してあまり良い気分がしない。
　現状のＩＳの意味を履き違えている奴らの巣窟じゃねえか」

　それに対してラウラはその通りだと頷き、クラリッサは苦笑する。

一夏はＩＳを造った篠ノ之束の心情をある程度は理解している。そもそも一夏と千冬、そして束の３人で『いつか宇宙にこの３人で行こう』と言い合ったのがＩＳが造られた原点だ。この事は箒は知らんがな。

宇宙に羽ばたくＩＳは『兵器』となって地球の重力に引っ張られながら空を羽ばたく。束本人が望まぬ怒りと悲しみを撒き散らしながら。

その現状『兵器』であるＩＳを『ファッション』として自分を飾る物と捉える女達が多くを占める。そう捉えないものと言えば軍関係者や企業関連の代表ＩＳパイロット達や、一部の考えに至っている者達だけだ。

ＩＳ学園はその典型的な例であり、『ＩＳ学園に行く事が自らを飾る物となる』と言う考えで来る者達が絶えない。

一夏はそれが嫌でしょうがなかった。

拉致される前、己の姉がＩＳで戦乙女の称号を得た時辺りの女達は己の姉が達成した偉業を『自らが達成した様に振る舞う』事に嫌悪感を隠さなかった。

小学生だった一夏にとって、それがとてつもなく屈辱的な光景だったことかと今も尚覚えている。

「オレは千冬ットの偉業を、穢すような奴等の所なんざ真っ平御免だァ……」

普段は千冬に対して嫌そうに振る舞う一夏だが、根本的な部分では心の底から己の姉を尊敬している。

男のツンデレなんざ誰が得するん…（ポーヒー）…ギャァァァァァァァァァァァァァァァ!?

「――――だが、ＩＳ委員会だけなら行く気はしなかったがこの基地の司令官からの命令なら受け容れてやる。」

「では、了承と言うことだな。」

それに対して一夏はただ頷くのみ。

「クラリッサ、この事を司令官に報告を。

私はまだ一夏に言わねばならん事がある。」

ラウラからそう言われ「分かりました」と、クラリッサは言うと部屋から出ていく。そ

こから少しの間、何も喋ることが無くただただ時間ばかりが過ぎていく。
それに対して一夏は苛立ち「話があるんじゃないのか」と呟く。
「今回のＩＳ学園への入学で、ＩＳ委員会から一夏に専用機が渡される。」
「それで？」
「……　大変言い難いのだが、その専用機と言うのが『ＩＳであってＩＳとは思えない』物なんだ。」
そう言ってラウラはどことも無く一つのファイル『織斑一夏専用機』と書かれた物を出す。一夏はそれをペラペラとめくっていくと、なんだこれは？と声に出す。
「一夏に渡される専用機《悪人》は、従来のＩＳとは違って装甲は手足の装甲以外必要最低限のシステムと機能しかない最低欠陥品そのものだ。」
表示されるのは手足に付けるだろう特殊装甲。それだけだ。機能は『非常に硬いカッチン鋼使用の圧倒的防御』と『光線耐性特殊塗料』だ。
色はこれでもかと言うほどの金色。

そして、一夏は気付く。ブロリーと呼ばれるあの伝説の超サイヤ人が身に付けていたものと同じ腕当てと脚当てだ。

「余分なものがない代わりに、パワーアシストと機体最高速度が他の機体より圧倒的に速い。」

ラウラがそう言ってる時、一夏は項垂れていた。何故か？答えは決まっている。

「ラウラ。俺の方がＩＳより強いんだが」

「一夏から見れば『拘束具』だろうな」

スペックを見たが、どれもこれも一夏の方が上なのである。一夏から見れば窮屈な拘束具そのもので、貴重な専用機とて『邪魔』の一言なのだ。

「一応教官から伝言をもらってる立体録画映像を流すぞ。

『これは一夏……　お前の能力を下げるための拘束具と思ってくれ。

素の状態の人間がＩＳより強いなんて言ってみろ？

ＩＳ委員会と女権団、さらに変なマッドサイエンティスト共が押し寄せてくる。
そうなるとお前はそいつら全員血祭りにあげるだろう。
それが後々国際問題に発展した場合、お前はその喚いてる奴らも結局血祭りにあげるだろう。
とりあえず、怒るならある程度の拘束は必要と判断した私に怒れ。
なお、専用機は四月の初めの週中にはＩＳ学園に直接届く。あと、ラウラは５月の途中から転入の形でＩＳ学園に入る事となっている。せいぜいハニートラップに引っかからんことだな。』
――――――――――――だそうだ。」
「……　ちっ」

何はともあれ、ある程度の拘束は必然的事だった。
ＩＳ以上……　以下無しの武力を持つ現在の一夏は、ＩＳとて勝つことは出来ない。はっきり言えば某機動戦士の艦長が放つ『愛の核弾幕』ぐらいの戦力がないとダメだという事だ。

「思ったが、今日は３月３０日だが入学式まであと何日だァ？

学校なのだから当然勉強の教材がある筈だが？
俺にそんなものが届いたって情報は聞いてないぞ」

「今日入れて……　あと２日だな。
ちょっと待て……　教材等は――――ん？
教材どころか教科書や必要物も何も届いてないぞ。
なっ……　勝手に映像ｇ『ＩＳ学園に入るために使う物は既に学園に、提出書類は私がやって置いた。それと、３月３１日にＩＳ学園に来る様に』……　消えたようだ。
い、一夏？」

ブチブチッ

「千冬ロットォオ……　!!」

一夏からその様な音が聞こえた。次の瞬間、一夏の気が高まり基地がゴゴゴッ……と震える。急に部屋のドアがバンと開く。

「おままままま!?お待ち下さい!?」

入って来るのは左目に縦の傷跡がある司令官。とてもダンディである。

「明日までは!明日まではお待ち下さい!?」

そう。明日ドイツ政府とＩＳ委員会からの視察団および技術者達がこの基地にやってくるのだ。その前に基地が破壊し尽くされては、この基地の評価は何もかもお終いだ。

（なんとしても今一夏君を止めなければ基地は荒廃し、評価は何もかもお終いだァ……）

そんな司令官のお待ち下さい☆を聞いた一夏は

「出来ぬぅ!」

い☆つ☆も☆通☆り☆

「ｄｏｏｒ!?」
「司令官ぁぁぁん!?」

一夏は基地を破壊尽くしながらすぐ様飛び去った。緑色の炎が空に一際目立ち、欧州のニュースで取り上げられた程だった。そして、基地は荒廃して司令官は真っ白に燃え尽きた――――司令官ＤＥＡＤ　ＥＮＤ。

「など等思っていたお前達の姿はお笑いだったぜ☆
さあお前達、半日で基地を元通りにするのです！」

ダメデス！
コノバカヤロー！
シレイカンナンテウチュウノアクマサ！

「フゥアッハゥハッハッハッハ☆」

この始末☆

伝説の超日本人一夏君５話

ＩＳ学園　日本のとある県の海上に作られし人工島。本土と人工島を繋ぐ交通路はモノレールの一つだけ。世界各地から来るＩＳを学ぶ者達を守る為、学園における機密を守る為の手段としてあらゆる防衛手段・警備体制を敷いてたりもする。

そんなＩＳ学園周辺空域にそれは居た。

「畜生……　もう入学式始まってんじゃねえか！」

我らがイチリーこと伝説の超地球人　織斑一夏だ。イチリーはあの基地を飛び出した後、何処でなにをしていたのか？

「こんなだったら、あらかじめラウラに日本の方角を聞いとけば良かった……　はぁ」

この男。あの後北東方面に飛び続け北極にたどり着いたのだ。その後今度は何を血迷ったのか東南方角に飛び続けロシア、カナダ、アメリカ……　と飛び続けたのだ。そ

して遂にハワイにたどり着く。途中白い全身装甲のＩＳに追われたが、虫けらサッカーで蹴り上げて撒いた。

「ハワイに日本人居て良かった……　あーもう疲れた」

　ハワイにいた日本人の女性……　篝火という女性に日本の方角を聞いた一夏は遂にここＩＳ学園にたどり着いた。しかし、現時点で幾数日も経過しており今や入学式が始まってるではないか。

　一夏はＩＳ学園に向けて全速力で突撃した。多くの気が感じられる体育館のようなものが見え、その中から一際大きい気を……　己の姉である織斑千冬を見つける。何はともあれ、今は入るのみ。

「千冬ロットォォーーーッ!!」

◆

　ズゴン……　その様な鈍い金属がぶち破られる音が体育館に響いた。

「えっ？」

この時丁度入学式にて生徒会長として、新入生達に向けてこの学園に関する説明をしていた更識楯無。今この体育館こと入学式会場には全校生徒、全職員、保護者と言った者達が集っていた。その中でも今己が話をしていてこの場が静かだったから、余計にその音が大きく聞こえた。

「千冬ロットオオーーーッ!!」

その叫びと共に上半身半裸の白目緑髪の筋肉ダルマが落ちて来た。もう一度言う。上半身半裸の白目緑髪の筋肉ダルマが落ちて来た。

「き……」

「き？」

「きゃああああぁぁぁ!?」

「ヘアッ!?」

叫ぶなと言うのが無理な話だ。後にこの時の事を更識楯無は「永遠のトラウマ」と話

している。この叫びが切っ掛けでこの場が悲鳴の嵐となった。

◆

「黙れェェェ!!」

あまりにも五月蝿いので気を放ちながら一回叫んで先程、俺が入ってきた時のように静かにさせる。

「おい、貴様」

「わ、私?」

「貴様以外に誰がいる。織斑千冬ロットは何処だァ?」

俺の問に対して目の前で腰を抜かしている女に姉の居場所を訪ねる。女が指を指した場所を見ると白目を向いてる姉が居た。俺は己が顔が笑顔になるのを知覚しながらも姉に近付く。

「動くな!」

「怪しい奴め大人しくしろ！」

　この場にいた警備員２人が俺の前に立ち塞がる。悲しいかな。その程度の力でこの俺を止めることは出来ぬぅ！

「ふひひひ！
　さあ、どちらから遊んでやるかァ」
「ひっ……「ビビるな、攻めろ！」……　は、はい！」

　警備員は勇敢にも一夏に対し、拘束しようと動く。

「ごっ!?」
「ぎいっ!?」

　しかし、立ち塞がる警備員２人と俺では、あまりにも背の大きさが違い過ぎる。故に巨大な手で頭を掴まれぶら下がりになってしまった。相手が避けようとする前に一瞬で掴んでしまえば逃がさず捕まえられる。そもそも、コイツら恐怖で足が震えている

故、あまり動けなかったのがオチだ。何処からか悲鳴が聞こえたが無☆視です。

「お前は昼間の星にしてやろう」

「何をっ!?」

左手に持つ警備員の男を中心に球体の気を作り上げ、それを体育館の天井に向けてぶん投げる。そして天井を突き抜け蒼天の空に上がっていった男はデデーン☆という音とともに緑色の爆発の中に消えた。会場からは物凄い衝撃が伝わるのみで、それがより一層恐怖を強める。

「お前も……　昼間の星にしてやろう」

「嫌だ、死にたくない……　死にたくない！」

先程のものであの警備員がどうなったのかは誰もがわかる話で、それを理解している警備員の女が泣きながらそう言う。でも俺は『楽しい』からやる。それがこの俺の本能だからだ。

「ふおぉぉ!?」

先ほどと同じく、俺は警備員を昼間の星にしてやった。うむ、綺麗だ。さーて、我が姉は……

「やあ☆」

「い、一夏……」

◆

会場は異様な空気に晒されていた。世界最強『織斑千冬』、それに対して目の前に立つのは摩訶不思議な不気味な力を示す悪魔の様な男。

「……　我が姉ながら、慕われた者だなァ?」

「貴様も、我が弟ながら凄まじいと褒めたい所だよ」

会場はざわついた。織斑千冬が目の前にいる男を弟と呼んだのだ。それはつまり……　行方不明、もとい死亡者扱いされていた織斑一夏だとこの場の人々は知覚す

る。

しかし、あまりにもその姿に差があり過ぎる。

「だが、今は気を抑えろ。」

「ほう……　貴様は俺に対して他人に気を使えと?」

「それぐらいは誰だって出来る。お前もそうだろう?それにお前が今来たことで、本来この式の最初に紹介するつもりだったのを態態遅らせたんだ。それぐらい許せ」

「……　ちっ」

そう言われ一夏は気を抑え通常形態に戻る。それと共に身長が縮み、緑髪白目から黒髪黒目に変化する光景に誰もが言葉を失った。

「一夏、先程の警備員は死んだのか?」

「いや、生きてる。」

そう言うと一夏の入ってきた天井の穴から先程の警備員2人が落ちて来た。なんという事だろう……　まさかの無傷である。

「あ、あの……　織斑先生」
「ん？なんだ山田君」

そんな中、千冬の隣に座っていたこの学園の教員である山田先生が千冬に訪ねる。

「そこにいる彼が織斑先生の弟さんだと言うのは分かるんですが、何故ここにいるのでしょうか？」

それに対して千冬はあっという表情をして、それを見た一夏は「言い忘れてたのか」と愚痴る。千冬は一夏に「付いて来い」と言って、あっけらんとしている会場の登壇場へと跳躍して一夏もそれに続く。未だに訳が分からず腰を抜かし放心している楯無に対して千冬は「今は自分の席に戻れ」と背中を軽く叩いた後一言言う。それで気を戻した楯無はフラフラと席に戻ったのを見送ったあと登壇場のマイクを取り千冬は喋り始める。

「新入生・在校生・保護者の皆様方、おはようございます。私はこのＩＳ学園で教鞭をと

らせて頂いてますＩＳの実技及び専門学担当を行っています織斑千冬です。」

千冬は凛とした態度と声でそう言う。伊達にＩＳで世界を制した訳では無い。その身から出る覇者としての風格、カリスマ性が出てこの場の空気が張り詰める。

「本来なら、この式の初めにご報告する予定でした。しかしこちらの都合により、今その報告を行う事をお許しください。

こちらの私の横に立ｔ……　浮かんでいる男、これは数年前に世間一般で亡くなったと報じられた私の弟である織斑一夏です。そして、『世界で初めてＩＳを動かした男性』です。」

その一言に会場がざわついた。それに対して一夏が千冬に小さな声で「コイツら殺していい？」と言うが「却下だ。」と言われそっぽを向いた。

「彼は今年度の新一年生として3年間、このＩＳ学園に入学させて頂きます。

初めての男性ＩＳ搭乗者として、保護も兼ねての決定になります。――――一夏、挨拶しろ。」

黒曜石の様などす黒い目でこの場全体を見渡して、一夏は千冬から投げもらったマイクを手に浮かびながら喋る。

「えー……　ＩＳをファッションとでも勘違いしている虫ケラ共、初めまして女尊男卑の被害者の織斑一夏だ。

なんかＩＳなんてモンを動かせたからここに来させられた。何処の誰と同じクラスになるかは知らんが、よろしくされるつもりもするつもりもない。そこの所覚えとけ。」

さらっとそう言ってマイクを千冬に投げ渡した一夏。それに対して千冬が「限度というものがあるだろう」と言うが、一夏は「視線がうざったい。」と言って不貞寝し始めた。

伝説の超日本人一夏君６話

「むぅ……」

あれから数刻、現在俺は自分の在籍するクラス……　一年一組の教室にいる。流石に俺程の長身者が入ることを想定してなかった扉は、俺にとって小さ過ぎた。なので扉を曲げて無理矢理入った。席は……『教室の一番真後ろ』で、最初は中央列一番前の席だったのだと言うが俺の巨体では授業妨害になる為急遽こうなったのだと言う。

教師が来ないので暇でしょうがなく、俺は小さ過ぎる椅子には座れないために舞空術にて空中に浮かんで待っている。学生服？んなモンあるか。

「……　チラチラ見るんだったら堂々と見ろ」

チラチラと見てくるのが不快でしょうがない。一人だけ両手を併せて南無南無としてた奴は俺を仏像とでも思ってるのか？

俺がそう言うと餌に食いつく魚のようにクラスメイト達が俺の方向を向いて話し掛

けてくる。ドイツ軍基地ではこうは簡単に話しかけてくる奴らはいなかった。数週間の間を経てやっと話しかけられたぐらいだと言うのに、ここにいる奴らはある意味図太いというのか興味本位が勝ってるのかと思える。

――――ふん。そんな事気にすることでもなかろう

最近の話だが、あの夢で接触した俺の体にその一部が埋め込まれている『伝説の超サイヤ人』であるブロリー。その意識がどうやら俺の体の中で芽生えたのだ。最初はほんの小さな声が聞こえるぐらいだったが、何度も夢で接触して更に日常生活でその意識が俺に話しかけてくることにより認識させられた。ブロリーの意識がある時、頭の中で糸がピンと張っているような感覚がある。　俺はその内にブロリーが体を勝手に動かしてしまうのではないかと思っている。まあ暴れることは好きなので別に構わんが。

要は俺の体は俺と伝説の超サイヤ人ブロリーの二つの意思があり、その内ブロリーが勝手に体を動かしてしまいそうになっているという事だ。

――――早く暴れ回りたいブロリーです……　はい。

俺は目を閉じ頭の中でブロリーに話し掛ける。

（アンタは……　どうやってこの星に来たんだ？）

純粋な気持ちをぶつける。このブロリーは俺……　地球人から見れば大いなる大宇宙からやって来た宇宙人であり、その身一つで宇宙を移動出来る。好き勝手に銀河間を行き来して、暴れ回っていた。夢からすれば『異世界』……　そこから世界を跨いでどうやってこの星に辿り着いたのか。

――――……　屈辱的な事だがオレはカカロットに負けた。クズ共のパワーを集めた程度の力に負けぬと、死に損ないのカカロットなぞに負けぬとなァ

（夢の通りなら、アンタは負けた。）

――――確かにそうだ。カカロットはあの時、ほんの一瞬だけオレのパワーを上回った。腹を貫いて、オレの気が暴れ膨張し……　己の内側からの爆発とあの星の爆発で死んだ。気が付いたら貴様の中にいた訳だ。

それこそ夢の通りであり、ブロリーはカカロットの一撃で死んだのだ。だがそれ以降

の事は分かってないみたいだ。
俺は確か昔見た漫画で、謎の光や空間に吸い込まれ別の場所ｏｒ別の世界に転移すると言うものを見た事がある。もしかしたらそういう経緯でこの世界に来たのかもしれない。
――――なんなんだァ……　それは?
戦い食うこと以外は何も知らず、人生は常に戦いと共に生きてきたブロリーにはよく分からなかった。だから脳筋なんて言わ『ポーヒー』……　ギャアアアアアア!?
――――ほれ、どうやら来たようだぞ
一夏はブロリーにそう言われ、千冬の気が近づいているのを知覚する。しかし、ブロリーに千冬のことを教えてないので何故知ってるのかと聞こうとした時にはブロリーの意識がある時にある感覚が無くなっており、意識が深く沈んでいた為聞くのを諦めた。
閉まっていた教室の前扉が開いて、緑髪の女性が入って来た。一夏は中学生・高校生……　いや、それ以下か?と考えた。しかし、女性の胸が実に豊満である為其の考え

を捨てて喋り出した女性の言葉を聞く。

「皆さん初めまして！
わたしはこの一年一組の副担任を務めさせていただきます『山田真耶』と申します。
これから一年よろしくお願いしますね！」

まさかの教師であった。いやいや、幾ら何でも見た目若すぎじゃねえか!?あれで俺より年上なのか!?

――――ぬう。なんだ珍しく騒がしい……
（見てくれブロリー。今前にいるあの緑髪の女、アレで俺より年上だってよ。）
――――サイヤ人も見た目の割には若い事なんて当たり前だァ。　戦う為に若い状態が異様に長いからな……　まあ親父いから聞いた事だがな。
（なんでだ？）
――――戦う為以外に何がある

そうこうしていると緑髪の女性の話は終わったようだ。そして、その終わった丁度の

タイミングで教室に姉が入って来た瞬間、ソニックブームが起きたのではないのかという衝撃が鳴り響いた。窓を見れば窓ガラスに罅が入ってるではないか……

「やはり、千冬ットは女にはモテるようだな？ええ？」

千冬は瞬間移動をしたかのような速さで浮遊している一夏の前に移動し拳を振るうが、一夏はそれを膝で簡単に受け止めた。空気が破裂したような音が鳴り響き、教室にいた人々は突然の破裂音に驚き叫び声をあげるのをやめて音の鳴った方角を見た。

「言ってくれるじゃないか。え？

誰が！　男に！　モテナイ！　売れ残りだぁ!?」

「そこまで言ってないだろうが」

千冬が激しい連撃を繰り出し、一夏が全て膝で受け流す。それだけでクラスにいた人々はドン引きした。暫く続けていると、千冬は拳を下ろし一夏に問う。

「学園では織斑先生だ馬鹿者。

なぜずっと浮かんでる？」
「小さ過ぎるんだ。見てみろ……（メコォ）……潰れたぞォ！」
「……　業者に特注の椅子と机を作らせるから、それまで机はそのまま使え。」

肩を下ろしてそう言い、教壇の前に立つ。

「さて諸君。私は織斑千冬……　知っている者も多いが、かつてＩＳの世界大会モンドグロッソを制した者である。だが今この時からそんな事忘れろ。
今諸君等の目の前に居るのは『ＩＳ学園の一教師』としての織斑千冬であり、弟を守れなかった愚か者だ。
私の教師としての仕事は、貴様らＩＳの道を選んだ小娘共を正しき心を持って未来に向かわせる事だ。」

千冬はそう言って一息つき、「私には許せない事がある」と言う。

「私は『女であるからして男より偉い』何ていう今ある女性主義者が根っから大嫌いだ。近年、その様な連中が世の中威張り歩いているのが非常に不快に思う。

私が弟の為に、そこに居る織斑の為に頑張って掴んだ栄光。それを見ず知らぬの人間に勝手にいいように使われているのは許せん。

そんな連中が弟にちょっかいを出していた事についても私は許せない。大事な弟が傷つく要因を作ってしまった私自身も許せないと思っている。」

そう言って千冬は教室を一瞥してから再度喋り始める。

「何人か今私が言った言葉に対して不服そうにしているな。別に私の言葉に従えなんて言うことは無い。だがな、私が受け持つ生徒が馬鹿げた理由で他人に迷惑をかける様であれば指導する。徹底的にな。

結局、『今は男より女が強い』なんて言葉は『女がＩＳを纏っている』時だけだ。　そうだな……　オルコット、貴様そんなはずは無いと思ってるようだな?」

唐突に指名された生徒……　金髪のロール髪の生徒が身体を震わせ、その言葉に反応する。

「いえ、そんな事は……「お前の顔を見れば分かるさ。」……」

千冬は釘を指したのだ。1年生の中でも一際プライドが高く、そして高い身分でもあるこの生徒。ＩＳ学園の第一学年では毎年この様なもの程そのような傾向がある。

千冬は一夏が失踪してから初めて、弟の友人達から学校で……　地域で迫害を受けていた事を知ったのだ。一夏本人は気にしてないようだが、千冬はもう二度とその様な事を受けさせないようにとその決意を固めているのだ。

「織斑。中学一年の頃の貴様に、ここに居る生徒は勝てると思うか？」

一夏は千冬が言った頃の普通だった己を考えてみる。一夏はある年齢になるまでは武道……　剣道をやっていたが、それを過ぎてからは我流剣術をやっていた。迫害のせいでそれなりに喧嘩もしてきた。それ故にその辺の素人なら負けることはないと思った。

「無理だ。と言うか普通の生徒が生身での戦いなんざした事ねえだろう。

まあ……　こんなかであの時の俺にギリギリ勝てそうなのはそこのオルコットとか言う小娘。」

そう言った。普通の……　一般の男女の身体能力、それも１０代の男女となれば大きく差がある。個人差もあるがやはり男女の身体能力差は、覆しようのないこともある。

「俺から見れば……　そうだな、相手になるのはそこに居る元世界最強とあの人だけだろうよ。」

「単純に言ってみれば、今の世の中の女は思い上がってる。単純にＩＳという兵器にもなるモノでな。」

休み時間。学生生活にて一番初めの休み時間と言うのは新しいクラスメイト達と仲良くなり、親睦を深める時間だろう。だが、俺は違う。

教室・廊下……　その隅々まで女子生徒で溢れており、その視線は俺に注がれていた。どうでも良いがな。

椅子は俺が座ったらジャンクになったので浮いたまま。余計に目立つが地面に座ってたら、それはそれで女性主義者共が調子に乗る……　結局この方法しか案はなかっ

たのだ。

ふと、視界の端になんだか見覚えのあるポニーテール女子が見えた――――が、無視☆

「ハァ☆……　って、違う!?」

面倒臭い感じがすると思い視線を逸らした。しかし、ズボンの一部を掴まれ空中に浮いてる一夏は風船の如く何処かに連れ去られた。そして気付いたら屋上で、屋上のｄｏｏｒは破壊し尽くされていた（なにもかも御終いだァ）。

「久しぶりだな一夏。」

破壊し尽くされた屋上扉前には覗き込む生徒達がおり、一夏は気でそれを認知していた。自分を一夏と呼ぶ女子生徒はそう言うが一夏は反応しない。

「……」

単純に分からなかった
記憶から消えていた
そんな単純な事だった。

「おい!?」
「……　誰だァ?お前は。」
「なっ!?私だ!篠ノ之箒だ!分からぬのか!?」

一夏の前にいる女子生徒……　篠ノ之箒は、告げられた言葉に対してそう言う。
それもその筈だ。なぜなら初めての出会いから篠ノ之家と別れるまで、一夏にとって篠ノ之箒という少女……　スゴクシツレイ!という言葉を体現していたのだ。
最初は篠ノ之箒の親である篠ノ之柳韻が師範を務める『篠ノ之剣道場』に入り、篠ノ之箒から剣道について色々教えてもらってただけだった。しかし、その後、何とも我が物顔でなにかと無理矢理どこかに連れ去るなど一夏の都合なんてなんのその。小学生のまだ一夏と篠ノ之箒が同じクラスであった当時、同じクラスの女子生徒と話していたら急に怒鳴り散らすなんてことは多々あった。それは段々とエスカレートし、遂には一夏の人間関係にも影響が出てしまった程である。

これには篠ノ之箒の親である柳韻も織斑宅まで来て土下座で謝る程であり、一夏は気にしてなかったが表面上はその謝罪を受け取った。結局、それ以降も篠ノ之箒の行動が変わることなくとある理由で転校するまでずっと続いた。転校後、一夏はあまりにもどうでも良い事であった為にこの一連の事を全て頭の中から消し去った。そのついでに『篠ノ之箒という少女が居た』という事も頭の中から消し去り今に至る。なお、これに気付いてるのは姉である千冬と篠ノ之箒を除く篠ノ之家全員。

――――一夏からすれば完全に初対面で、篠ノ之箒からすれば数年ぶりの再開となるの事を一夏は知らない。

「は、ははは……　な、なにを馬鹿なことを。
もうダメだ…おしまいだぁ…。」
「一つ言っておくぞ箒とやら。」

一夏は両手両膝を地に着き落ち込んでる箒に対して言う。

「俺はある事で昔の記憶が消えてしまってな。
恐らく、その消えた記憶の中にお前が居たのだろう……　だから俺は知らんがお前

は俺と会うのは久しぶりだな箒？」

　記憶が消えたのなんていうのは嘘である。だが、あまりにも落ち込んでる箒を見た一夏のせめてもの情だったのだ。

「っ……　一夏ァッ！」

「ヘアッ!?記憶消去ォォーーッ!!」

「「「ちょ!?（ポーヒー）こっち来るるる……　ギャアアアアアアア!?」」」

　急に抱きついてきた箒に戸惑い驚きの声を上げる一夏。その瞬間を目撃した屋上の破壊し尽くされたドアの前に居た女子生徒達に気弾を投げつけ、爆炎が広がった。

　南無三！除いていた女子生徒達は真っ黒アフロヘアー化し、アフロの山となっていた。ナミアムダブツ！

　丁度その時、授業開始のチャイムが鳴る。腰にガッチリとホールドを決める箒ははがすことが出来ない。ならばこのまま教室まで行くしかない！

「うおおおおおお!!」

飛ぶ！
走る！

一夏は箒に腰をホールドされながら急いで教室に戻る！教室を気で探知するがまだ教師が教壇に立っていない……　間に合ったかと思いそのまま先程破壊し入り口が大きくひしゃ曲がった扉を潜る。

「ぬお!?」

足に何かが引っかかった一夏。もの凄い勢いで回転しながら教室の窓を突き破り校舎外に落ちた。その光景を窓から見ていた人物がおり、その手には目を回して気絶している箒の姿があった。

「腐☆腐……　間に合ったか!?と思っていたお前の姿はお笑いだったＮＡ☆
私は気配を消す技術を身につけたのだ！フゥアッハッハ☆」

千冬だ。我らが最強と最凶（混沌）を極めし一要因である。高笑いしているその姿を見ている教室に居た生徒達は顎をあんぐりと開けて思考停止中である。

「そうか……　ならばオチらせるまでがお約束だよなァ？」

「ゑゑゑゑ!?」

千冬は背後から掛けられた声の主に気付き、そしていつの間にか己が何かの中に入っていた事にも気付いた。　窓だと思われる所から一夏の凶悪な顔がこちらを捉えていると。

「そうか（諦め）……　私は（流れを理解　）」

なんという事だろう。千冬が入った謎の球体……　サイヤ人印の一人用のポッドを変身した一夏が、両手で持ち上げもの凄い勢いでポットを潰していくではないか！

「おおお!?これが私の（ギャグ補正の）運命だと言うのか……　!?はぁ（ため息）」

「うううう……　おおおおおおおおおおおあっ!!」

千冬は流星になった。

伝説の超一夏君７話

千冬が流星となって幾数分。何事も無かったようにいつの間にか教室に入って来て、一夏を含んだ1組の生徒達が戦慄した。この件を『織斑千冬アイルビーバック事件』と後から呼ばれるようになるのはまだ知らない。

「あっ」

何事も無く普通に授業を行っていた凛々しき（笑）我らが織斑先生は、唐突になにかを思い出したかのようにそう呟く。それに対してあぐらをかいて黙って授業を見ていた一夏は、これが何かしら嫌な事の前ぶりだと感づく。

「諸君、忘れていたのだがこのクラスの代表を決めなければならなかった。」

「せぇぇぇぇぃ！」

電光石火の如き速さで電子黒板に叩き付け、強い一撃を食らわす一夏。その衝撃にク

ラス中から悲鳴が上がるがお構い無し……　だが千冬はなんともないように「無傷という訳だァ☆」と無傷である。一夏は舌打ちをして元の席に戻る。

「クラス代表についてだが、これは日本の生徒には馴染み深い『学級委員長』みたいなものだ。それ以外の国からすれば読んで字の如くの意味だ。

役目としては……　これが一番の役目だが来月の『クラス代表トーナメント戦』出場、クラス会議での指導員……　雑用とかそのようなものだな。

推薦でも自薦でも構わんぞ。誰かやらないか？」

そう言うとクラス中から「織斑君がいいです！」「私も織斑君を！」と俺を推薦する声があがる。

「お前達、俺を推薦するが何か理由があっての事だろうなァ？」

俺がそう言うと「唯一無二の男性操縦者だから！」「このクラスの特権！」「ほとばしる筋肉が見たい！」「織斑君は……　超日本人だ」と、なにか一部よく分からん事が聞こえた。

俺は女子のこの勢いに圧倒された。女子が何人集まればなんとか……　ってのは、本当みたいだな。まあ、やってやるか。

「織斑以外は……　居ないようだな。
織斑、これでいいか？」
「ああ。わｋ『待って下さい！』……　なんだァ？」

俺が了承の言葉を言おうとした際、確か……　オルコットと呼ばれた女が机を強く叩いてそう叫ぶ。おいおい、強さが足りんよ。もっと机をメコォと言わせるぐらい強く叩け。

「この男をクラス代表にするなんて貴女達分かってますの!?」
「ほーう、では何故小娘はそう思う？」

俺がそう言うと俺より前の席に居るオルコットがこちらを向くが、「ヒィ!?」と悲鳴をあげる。クラスメイト達も同様に俺を見るが、ほぼ全員が同じ反応をした。

「なぜ悲鳴をあげる？
　ほれ、貴様が思ったことを言えば良いだけだぞ？」
「っ……　そもそも貴方は入学式の時からやり過ぎです！
　天井をぶち破り、警備員を爆破させ、担任である織斑先生を叩き付ける。野蛮ですわ！」
「その程度でやり過ぎとはえらく許容量が少ない様だなァ？んん？」
「〜〜〜ッッ!!」
「んー？どうした。なにをそんな顔を赤くする。どうした？ん？んんんん??」
「「（あ……　悪魔たん……）」」

　一夏としては単純に理由を聞いてるだけだが、一夏の基本とオルコットの基本の差があり過ぎて認識の差というものが今このような事態を生んでいる。ぶっちゃけオルコットの女尊男卑思想や一夏の態度というものが、プライドを刺激して冷静な判断を奪っているのだ。
　オルコットの罵倒はエスカレートし、最初は男性の批判だったが後から日本の批判になっていた。このクラスは日本出身の生徒が多く、担任・副担任も含めれば３分の２以上が日本人である。このＩＳ学園は日本の国家予算から出された日本国民の血税と急

遽日本全国から集めた建築業を始め様々な職業の人々を総動員させ作らせた。　それを知ってる故に日本人が多いこの教室の空気は最悪な程にギスギスとしているのをオルコットは理解せず、それを知らずに喋り続けている。なお千冬の目は鬼の面をしており、何人かの生徒がそれに気付いてビビっていた。

そして、オルコットが放ったある言葉が一夏を怒らせた。

「所詮貴方なんて、織斑先生に守られてる野蛮な男なだけですわ！」

オルコットのその言葉を聞いて、教室から数人笑い声が聞こえた。

確かに俺は野蛮だろう。改造された肉体に埋め込まれたブロリーの肉片やら細胞によるサイヤ人の特性を得て、地球人とサイヤ人の混合体……　それによる戦いたいから戦うというサイヤの本能に従っている俺。否定しようがない位に野蛮だと理解している。俺は地球人にサイヤ人がほんの少しだけ混ざったみたいなものだが、サイヤ人としての誇りなんかも理解している。

「そんな貴方に親しくする人達も、さぞ野蛮な人達なんですね！」

だが――――それでも、こんな俺に親しくしてくれた奴らを侮辱されては我慢など出来ない。出来るはずもない。

「待て一夏！」

一瞬教室にバチっと電気が走る音が聞こえ、千冬がそれで何が起きるのか察知する。千冬が叫ぶがそれも虚しく、一夏は伝説状態に変身。教室内に殺意と絶対強者の圧を放つ。

「今――――なんて言った？」

「もう1度言った方がいいようですね……「オルコットも止めろ！」……ッ」

窓はひび割れ、校舎は震え、大気は一夏から放たれる圧と共振する。極限まで張り詰めた空気に教室にいる生徒達は震え上がることしか出来ない。一夏はゆらりとオルコットに指を向け、一言言う。

「オルコット――――お前から血祭りに上げてやる」

千冬は直感的に不味いと気付く。一夏が本気でオルコットを今ここで文字通り血祭りに上げる気だと、この学園を消し飛ばすつもりだと理解する。

「そこを退け。
俺はそこの小娘を血祭りに上げねばならん。」

それまで空中で胡座をかいた状態だった一夏が、地面に降り立つ。それだけで　ズンという重い音が鳴り響く。千冬は本格的に不味い状態だと理解する。何時もの態度ではなく一人の教師として、強者として、姉として一夏の前に立つ。

「それは出来ない。私は生徒を守る先生であり、生徒が生徒を殺そうとしているのであればそれを止めねばならん。」
「それでもそこの小娘は俺の誇りを、千冬ツトの大切な仲間を侮辱したのだ。そんな事、今の俺には耐えられん。」

千冬は内心オルコットに対して舌打ちをした。千冬だってオルコットが放った言葉

に対して、今すぐにでも怒りたいと思っている程だ。

「殺すのはダメだ。それだけはここでは絶対に起こさせない。」

「ほう？」

千冬は考える……　どうすればこの場を収められるかと。一夏はオルコットを血祭りに上げたく、オルコットは一夏を認めんと言って拒否をする……　まて、オルコットはイギリス代表候補生であり有名な貴族だったな。イギリスと言えば……　そうだ、これだ！

「織斑とオルコット、お前達に告げる。一週間後の放課後にＩＳにおける決闘を行う！」

千冬がそう言うと、張り詰めた空気と一夏から放たれる圧が霧散する。

「千冬ットォ……　それは、公の場でＩＳを使って血祭りに上げても構わんのだな？」

「ああそうだ。ＩＳならばいつもの１００分の１ぐらいなら織斑の攻撃にも耐えれるだろう。」

「お、織斑先生！わたくしの意ｋ「黙れ。貴様に何かを言う権利はない。」ぴい!?」

一夏と千冬が話してる間に、オルコットがそう言うが千冬の怒気を含んだ言葉に鳥のごとく悲鳴をあげるしかない。一夏は珍しく時に満ちた己の姉を見て巫山戯るのはやめて傍観する事にした。

「オルコット……　これはそもそも貴様が招いた種だ。

それと、貴様が言った言葉はその立場を理解しての事だと我々は捉えてるのだがそれでいいか？」

オルコット――――本名『セシリア・オルコット』　イギリスの古くからある貴族階級出身。イギリスのＩＳ代表候補生の一人にて、イギリスの試作第三世代型ＩＳであるＢＴシリーズの１号機『ブルーティアーズ』を駆る。イギリス本国では代表候補生としては一際有名でありオルコット自身努力家としても有名でありそれ故に人気もある。貴族・代表候補生・専用機・人気性と、持てるものは全て持ったのがコイツだ――――私が言いたいのはそれらを持つ立場だ。

そもそもＩＳを駆る者達にはいくつかのランク付けがある。それぞれＩＳ国家代表・

ＩＳ国家代表候補生・ＩＳ代表候補生・企業代表とある。企業代表はＩＳ開発を務める企業のＩＳを駆る者達である。国に関係する者達は最初に挙げたＩＳ国家代表からＩＳ代表候補生までである。オルコットはランクで言うなら3番目、だがその発言力は国家としてのある意味強い発言力を持つ。それ故に、発言した言葉は下手をすれば国と国の戦争の引き金にすらなる。

オルコットは日本とイギリスでの戦争の引き金になるかもしれない――――という事なのだ。

「オルコット――――『ＩＳ代表者必須項目』における第一訓を覚えているか？」

ＩＳ代表者必須項目？ＩＳ国家代表からＩＳ代表候補生までが必ず覚えておかねばならない教訓であり、主にその志に関係する事が表記されている。これには法的な縛りがある為、原則ここに記されている事は守らねばならなく、その一番初めの第一訓にはこう記されている。

第一訓？ＩＳ国家代表・ＩＳ国家代表候補生・ＩＳ代表候補生のいずれに属する者達はいついかなる時も、所属国家・所属外国家に対して敬意を払う事を認識せよ。そして、

所属国家の代表としての志を持ち不適切な行動をするべからず。

「あっ」

先程まで顔を真っ赤にしていたオルコットの顔がどんどん青ざめていく。一夏は一体何のことか分からないので首をかしげており、教室の何人かの生徒はあーあと察知してそう呟いていた。

今回、オルコットが行ったのは

・代表候補生として相応しくない行動

（立場等）

・日本に対しての罵倒行為

（ＩＳ開発者・世界王者が日本人なので両者に対しての罵倒も含まれる。世界が一番恐れていることでもある。）

「ＩＳ代表候補生としての貴様が、一番守らねばならない事を認識してないということだ。これを破ったことの意味……　分かってるのか？」

第一訓とは一番基本的なことであり、一番重要視されている項目。国の代表としての立場の為、下手な行動が国の存亡に関わることだってある。このＩＳが出てきて十年間にアジア、中東、欧州で数件だけだが国の存亡まで及ぶレベルの事をＩＳ国家代表から代表候補生までの者達が起こした事を確認している。

それ故にこれを破ると、過大と言ってもいいほどの罰が与えられる。その事に気付いたオルコットが全身を震わせ、顔面蒼白と言える程になっている。己の発言で日英での戦争が始まったら世界はＩＳが生まれた日本に味方をし、イギリスを攻め入るだろう。そうなればあとはどうなるのかなんて分かりきったことだ。

「だが安心しろ。この学園で起こした項目違反を罰する権利は学園長・ＩＳ委員会委員長から私に譲渡されている。」

これは千冬の功績と信頼からなった事だ。ＩＳ学園はどの国からも干渉出来ない国みたいなものであり、唯一まともに干渉出来るのがＩＳ委員会である。だが、ＩＳ委員会は過度の干渉はあとあと面倒臭い事になるので控えたい。そのため、世間的にも世界的にも有名であり実力もある千冬に違反者を罰する権利を譲渡した。それと、もう幾つかの緊急用の権利も譲渡している。それに対してＩＳ学園の学園長は承認して現在に

至る。

千冬の立場はその為相当特殊であるのは確かだ。

立場としてはＩＳ学園第一学年学長・ＩＳ指導学長・非常時指揮官・ＩＳ代表者罰則執行責任者……　それともう幾つか有るのだがそれは後々説明。

「違反者である貴様は、正々堂々と織斑とＩＳを使った決闘を行ってもらう。勝者にはクラス代表になるｏｒならない権利を与える。辞退した場合は負けた方がクラス代表になってもらう。罰なので拒否権は無いからな?」

千冬は教室にある電子時計を見ると、授業終了のチャイムが鳴りパンと一回手を叩いて話を終わらせるのだと教室にいた誰もがそれを悟る。千冬は授業を終わると言って教室をあとにした。

伝説の超日本人一夏君第８話

オルコットとの決闘が決まった放課後。

副担任である山田先生から教室で待っているよう言われ、ＩＳについての復習を教本を読みながらやっていた。　ＩＳは女性にしか反応しない為、その勉学は女子しか受けていない。その為に男である俺は他の生徒より何歩も出遅れているので、空いた時間は何かしら有効活用せねばならない。

もっともＩＳはパワードスーツ……　男であるなら憧れを持つロボット技術の一つで、俺もそんな憧れを抱いた過去を持つ。なのでロボット技術……　ＩＳ技術における専門用語は結構簡単に覚えれるので大した苦にはならなかったのが幸いだった。だが、整備関連の話はまた違う。こればかりは俺でも無理だった。手先の細かい作業が苦手な一夏にとって、整備の細かい作業に関する事はチンプンカンプンで必死になって勉強している。

――――……　一夏よ。どうやら来たようだぞ

少し前から意識が浮上しているブロリーからそう言われた。放課後に試しでブロリーの技を真似てみようかと言ったら『放課後になったら起きる』と言って、放課後になった瞬間から起きている。

「織斑君お待たせしました！」

んんんん!?目に毒ゥゥゥ……　!!

――――そんな事言っておきながら喜んでるではないか？

一応健全な男子だから反応するに決まってるんだろ!?あんなデカイのは……　反則だろうが……

「織斑君どうしました？」

「あ、いや……　なんでも無い」

「？」

こいつの前で邪念は駄目だと俺は決めた。千冬姉とはまた違う部類の人間と言うのは慣れん。

「えっと、それで用事ってなんd……　ですか？」

そう言ったらなんか鍵を渡された……　ああ。寮の鍵か。

「野宿かと思ったが違うのか」

「野宿!?そんな事させませんよ!?」

山田先生はリアクションが激しいな。いや、俺が野宿する前提で言ったのだから驚くなってのは無理か。早く体を動かしたいんだがな……　でも、教材はどうしようか……　今日は置いてくか。鞄なんて持ってないし。

「あのー……　織斑君、申し訳ないんですが……　少しいいですか？」

「なんだぁ？」

「その、寮の部屋なんですが女子生徒と一緒になります。」

あー……　まあ。分かり切った事だ。今朝の様子では本当に俺の存在は知らされて

なかったようだし、寮の部屋を確保できたこと自体がよく出来た。

「ん。山田先生は……　まあ、なんだ。
俺が同室の女子と淫らな行為しないようにと言いたいって事でいいですか？」
「あっ……　そっ、そうです」

あー……　この人こういう話も駄目か。なんかもう、この人には話しかける時気をつけねえとな。

あの後、俺は山田先生と別れて軽く体を動かせる場所を探した。その際に千冬姉と会って『本当に軽く程度、体の動きを確かめる程度なら剣道場に行けばいい。』と言われ、剣道場に向かっている。

「ここか」

剣道場に到着。まだ中で活動しているらしい剣道部員達の声が聞こえる。……　特

別申請はしてあると言ってたから大丈夫だよな？

履いてる靴を脱ぎ剣道場に入ると中は思いの外広く、これなら軽く体を動かせそうだ。中の連中が俺の姿を目にしてギョッとしている……　んん？話はつけたと聞いたが。

「君が織斑一夏君？」

一人の女子生徒がやって来た。……　この中で一際大きい気からして部長かなにかか？

「そうだ。それでアンタは？」

「私はここの剣道部の部長。話は織斑先生から聞いてるよ。」

ほう？話をつけてあるのは本当らしい。

「では４分の１を借りるが……　少し五月蝿くなるが構わんか？」

「別に此方も練習で五月蝿いと思うからいいよ。じゃあ他の子達にも言っておくよ。」

そう言って部長が部員を移動させたので、俺は剣道場の４分の１の空いたスペースに移動した。

「凄い筋肉よねぇ」

ＩＳ学園剣道部の部長である私は、織斑先生から聞いていた話を思い出していた。弟である織斑一夏が恐らくちょっとした運動をしそうなので、剣道場の４分の１を貸して欲しいと言われたのを聞いた時、彼は武道の何かを習ってるのかと思っていた。あの朝の件にしたってハチャメチャなのは分かっており、遠目に見ても鍛えられた体も凄いが今のすぐ近くにいる彼の体は凄まじい。まさに戦闘の為だけにある筋肉は、何にも負けなそうな屈強さを表していた。

「ぬぅ……」

目を閉じ、何か力を溜めるように構えた彼を部員を含めた私達全員が見ている。

「はぁぁっ！」

目を開けた瞬間、強烈な風が彼を中心にして吹き荒れた。その不可解な光景に風を受けきった私達は呆然とする。当たり前だろう……　なにせ屋内で突如強風が吹き荒れるなんて魔法か何かだ。私たちの驚きを置いて彼はまた動き始め、今度はその体の表面が淡くだが緑色に輝き始めた。

「体を渡すぞ」

どういう事だろうと思ったその時、空気が張り詰めるような感覚になった。　殺気だろうか？肌を刺すピリピリとした感覚になにやらヤバイと考えたが、私にはその前にこれから起きる事の方に興味が湧いた。

――――一夏よ。

体の気の流れを整え、これからやる事の準備を終えた。今からやるのはちょっとした実験である。

――――これから一時的に貴様の意識とオレの意識が入れ替わる事になる。成功すればの話だ

実験というのは俺とブロリーの意識の交代、それに伴い体を動かすことが出来るかというものである。　勿論制限はあり、主権をブロリーに渡した際に暴走気味になれば即座に俺の意識が交代させるというもので、肉体の主意識であるため出来ることだが。

これ以外にもブロリー……　サイヤ人の細胞による能力を今以上に引き出せるかもしれないのだ。やってみせる価値はある。

――――では行くぞ。……　ぬん！

一瞬のブレと共に視界の中に俺の姿があった。

「ほう……　ほう？」

どうやら俺の体はブロリーが操り、俺は意識体としてその周囲に漂っているようで……　これはどうやら成功したらしい。

「はぁ……　気が高まるぅ、溢れる！」

感覚が共有されているのか、体の奥底から気が溢れ出る感覚がある。それは前からあったが、溢れ出る気の量が倍以上……　それよりももっと多く、量が桁違いなのだ。俺ひとりの時とは違う、ブロリー本人が出ることでここまでの差があると驚愕する。

「……　こうか！」

ブロリーが一瞬少し力を入れたと思ったら、髪が金色に変色していつもしているあの形態と同じ髪型になった。初めて見る光景に驚いているといつの間にか視界が元に戻り、俺の意識は体に収まっていた。

もういいのか？

――――ああ。問題無く動かせる様だ。

この姿はなんだ？初めて見るが。

――――それは『超サイヤ人』。戦闘力を……　親父いによると５０倍に高め、なおかつ安定性があるだとか言っていたな。普段からいつもの姿になってみろ……　こんな狭い所が多くては鬱陶しいだろう？

考えてみれば確かにそうだ。あの形態になると身体は莫大に大きくなってこの学園では動きにくい。一々身体をしゃがませて入るのは面倒くさかった。

――――まあ貴様は通常でもソレでも強いのは変わらん。純粋な地球人如きに貴様がやられるはずがなかろう……　元に戻るのはいつも通りだ。

そう言ったブロリーの意識は消えたのか、いつものピンと張った感覚が無くなる。試しに軽く正拳突きとハイキックを何度か繰り出す。その都度に　ボッ！　という音が鳴り響き、確かに力が上がっていることが確認出来た。体の力を抜いて元に戻り……

「なんでお前達はそんな所にいる？」

剣道部員達が入口の外でこちらをのぞき込んでいた。ここで気付いたが、どうやらやり過ぎたようだ。道場内の床や壁、天井が所々壊れていた。

伊達に戦闘力が５０倍にアップしているだけはある……　否、それだけではこれは済まない。恐らくこれはブロリーが体を動かした事により活性されたサイヤ人の細胞能力が前よりも活発になっているのだ。それにより元々の身体能力そのものが大幅に、ブロリーの身体基準に合わせた能力向上を果たしたのだ。その為大幅に上がった身体能力に気付かぬまま超サイヤ人化してさらに底上げしたから普通に前以上に強くなっていた。

「……　申し訳ございません。」

この後、騒ぎを聞いてやって来た姉にしこたま怒られた。

徹夜で木材と道具を使って剣道場を直した翌日、オレは朝からＩＳ学園の上空２００

ｍ地点にて胡座をかいていた。それは何故か？単純に寝ていたからだ。どこの誰か分からん娘と相部屋で寝れないのと、部屋の扉で体か突っかかった。……　屋上にテントでも張ってもらおうか。

　時刻は午前５時半を過ぎた頃、ここから見えるＩＳ学園のグラウンドでは何人かの女子達が走り込みをしていたり、第二アリーナと呼ばれるＩＳの稼働許可が出ている場所からは幾つかの気が高速で動き回っているのを確認出来た。

「……　見てみるかァ」

　俺は第二アリーナの前に降り立ち、案内板に従って観客席に辿り着いた。稼働許可エリアでは打鉄とラファールと二種類のＩＳが戦闘を行っていた。

「むう。つまらん、実につまらないぞ……　これならまだあの基地の娘共の方が良い動きをしている。」

「そう言うな一夏ｙ「ヘアッ!?」……　ｄｏｏｒ!?」

　背後から聞き慣れた声に思わず裏拳で殴り飛ばし、千冬は殴られた威力に似合わない

ゆっくりな速度でバウンドし、その背後に出現した岩盤にめり込んだ。

「少し遅かったな？」

どうやら後ろに跳躍して衝撃を緩和してたようだ。

「ちっ……。

何故千冬ットが此処に居る？」

「今日の監視員だ。で、どうだ小娘共の様子は？」

「どうも『怖がっている』様だな。……あの娘はＩＳを『兵器』として見てるのか？」

どうも見た感じ筋肉が萎縮している。顔の表情もやる気……と言うよりは怖がっていると言っても良い。嫌々でやらされてるが、なにかに対し恐怖している？

「お前のその直感は凄まじいな。

そう……あの２人、どうも親御さんが女権団側の者でらしくてな。珍しくＩＳを怖がり、尚且つ『兵器として使われている』という認識でな。」

「ほう？あちら側の人間の子供がＩＳを怖がってるとは珍しい話だ。
　で？それがどう繋がる。」
「どうもＩＳ学園も一枚岩ではなくてな。何処からか、あちら側の内通者がいてあの二人の教員を通して圧力をかけているようだ。」
「内通者はどうなった？」
「よほど隠れるのが上手なのかなかなか捕まらん。そいつを捕まえれば何とかなるのだがな。
　まあ……　そうは言っても、そもそも私の管轄下での仕事ではないのでな。情報があまり回らん。」
「そうか。では聞くが、ここにいる教師は千冬ットだけか？」
「ん？ああそうだ。急にどうした？」
「それとあの二人の教員はここで練習している事を知っているか？」
「……　知っている筈だ。だが、私が監視担当の日は姿を見てないな。」

　恐らく内通者はこの光景も、映像か何か撮っている可能性がある。そうやって見張っている証拠になるからだ。だとするならこの場所の何処かに誰かいる筈だ。近くのアリーナの案内板を見て、気の存在箇所と照らし合わせて言う。

「『管制室』『Ａピット』……　この二ヶ所を抑えろ。此処に下郎がいる。」
「なに？」
「一人では無く二人だ。恐らく一人捕まったらもう片方は逃げるぞ？」
「一夏。お前はＡピットに向かって内通者を捕縛しろ。道は分かるな？」
「覚えたから大丈夫だ。ではな。」

その後、俺はＡピット内にいた明らかに外部の者であろう女を背後から襲撃。舞空術で近付いたので足音がならずに警戒してなかったから簡単であった。
そして、しばらく経ってから管制室の方からの放送でもう一人の内通者を捕縛したと連絡が入る。そこからは学園の方に連絡したらしく、教師部隊と呼ばれる緊急時の特殊部隊とあの初日に見た水色の髪をした娘がやって来て騒ぎとなった。
管制室からはデータ取り用のＰＣと特殊機材が確保され、なおかつ外部協力者数名に圧力を掛けていた存在について判明したそうだ。

「ちっ……　面倒だった。」
「朝から騒がしいと思ったがそんな事があったのか？」

自称聴取の為半日掛けて聞かれた俺は昼時になって開放された。偶偶だと思うが箒と一緒に昼飯を摂ることになり、食堂にいる。

「まあな……　ん？そんな騒ぎになってたのか？」

「ああ。私達の目の前で教師部隊員に教員が抑えられたからな。逆に知らない方が凄いぞ？」

「ほう。そう言えば箒、あのオルコットという小娘はどうだ？」

俺は昨日色々な意味でやらかしたオルコットの事を思い出す。俺の言葉に箒は渋柿を食べた様な顔をし、それはある意味答えを表していた。

「私達のクラスは日本人が多く、その為先日のオルコットの言葉に対して多くの人が怒っている。」

「まあそうなるだろう。流石に自分達の国を馬鹿にされれば怒るし、なんせこのＩＳ学園建設費用は日本だ。更にあらゆる設備全てが日本の税金で賄っている。ここで日本のことを馬鹿にすればどうなるかぐらい普通は分かる。」

「それでな一夏？
教室の空気は非常に張り詰めてて……「ほっとけ」……　ええ……？」
教室の空気が張り詰めているからどうした？　そりゃあ奴の責任だろう。まあ……
「奴との試合で徹底的にあの思想を血祭りに上げてやる。」
「……　それは別に構わないがどうするのだ？
ＩＳには乗ってないんだろう？」
箒がそう言って気付いたのだが、周りの生徒達が聞き耳を立てている。奴が代表候補生と言うことは、ＩＳの素人との差を表している。……　それさえ聞けば俺が負けるだろうと思えるのは不思議ではないが、別に構わないから言うか。
「ドイツでそれなりに動かして来た。
専用機も受け取る予定だ。」
「ドイツでだと？」

「数週間前までドイツの違法組織に拉致されててな。
その際に乗ってたんだ。」

嘘を混ぜながらそう言った。
俺のＩＳの仕様の事を言うにはまだ早いし、従来のＩＳとは一線を分けるのだ。衝撃的なことは最後に取っておく。だが箒にとっては今の言葉に衝撃的な事があったようだ。

「違法組織に拉致されていただと？
何時からだ!?」
「前のモンド・グロッソの時だ。」

その一言は辺りをざわつかせるのに足りていたのか、先程よりは多少会話が増えた。

「あの時はまだ常人の枠に居たからな。
……　まあ、そんな事はどうでもいいか。」

懐かしむ様にそう言うと、箒が般若の面の如く怒りの形相でこちらを睨みつけていた。一体何に対して怒ってるんだ？

「どうでも良くない！

一夏は私以外の知人が居たのでは無いのか!?」

「居たな。」

「だったら心配してる筈だろう!?」

「別に構わんだろう。

当時の俺に構ってたアイツらは、俺のせいでちょっかい出されてたからな……俺が消えて万々歳だっだろうよ。」

当時の友……と呼べる奴らがいたが、女性主義者から俺を庇うために行動してたのでちょっかいを出されていた。だから俺が消えてそれも無くなった筈だろうから、良かっただろう。

「非情で乱暴者で荒くれ者で結構。この価値観は俺にしかわからん。世界で一番ＩＳで強いと呼ばれる姉を持つ、たった一人の弟にしか分からないからな。」

気分が悪い。さっさとこの場から去るとしよう……　俺はそう思って席を立つ。背後で箒の叫び声が聞こえるが無視して歩く。すると食堂の出入口付近でコチラを見るオルコットを見付け、ちょっとした短距離の高速移動で背後に回ってみた。

「何処に……「後ろを見ろ」……　いつの間に!?」

予想通りの反応ありがとうとでも思っておこう。だが、典型的すぎてつまらんがな。

「貴様が何を思って俺を見てたのかは知らんが、そんな雑念だらけな状態で戦っても俺には勝てんぞ」

「貴方は専用機を貰う様ですが、それで私に勝てるとでも?」

当たり前の考えだ。普通ならそう考える。

「安心しろ。俺の専用機は『俺を縛る為の拘束具』だからな」

「何ですって……　?」

オルコットが怪訝そうに言うが、それが事実なのでどうしようもない。どのくらいの拘束力になるのかは不明だが。

「せいぜいその慢心を無くし、貴様が起こした事に目を向けるがいい。」
「貴方、一体何をおっしゃるのです!?」
「それが吉と出るか、凶と出るか……　貴様次第だからなァ」

最後にそう言って俺は立ち去った。暫くして思い出したが昼食とるの忘れてた。

伝説の超日本人一夏君９話

時は流れ１週間後の事だ。
第一アリーナＡピットにて俺は届けられた専用機もとい拘束具を身に纏う。その姿は超化でも無く通常形態で、ＩＳを纏っている。

「……」

身長がほぼ変わらない腕・足部分限定装着型ＩＳと言うのは珍しい。機体速度とパワー出力に超特化し、尚且つ珍しい金属素材であるカッチン鋼を使っている為に腕・足部の装甲の硬度はＩＳの中でもトップクラスだ。その装甲にはさらに光線……レーザー耐性もある。

「ふむ。動きは悪くない……」

上半身は特性の対Ｇおよび対実弾・光線耐性製のＩＳスーツを、下半身は学園に来た時に履いていた物を着用している。提供元は『ラビット工業』とされていたが……まあいいか。

「織斑」

背後から姉から声が掛かる。珍しく真面目な教師状態……　恐らくこの戦いに公平を保つ為、肩入れするわけにはいかんからだろう。

「なんだァ……」
「体の異常は無いな？」
「問題無い」
「試合開始時間になったら山田先生から通信が入る。
開放回線及び個人間秘匿通信のやり方は理解出来てるな？」
「勿論だ。」

視線認証で悪人のステータスを表示命令を出し、すぐ様視界の中央に現れた機体情報

欄に目を通す。

ＩＳ名？悪人（デビルマン）

分類？第一世代特殊試作弐拾六型（腕・脚部限定装備）

ＳＥ量？８５０

装甲？カッチン鋼・光線耐性液体塗装複合装甲

武装？無し

防御展開機構？全機構稼働状態

『織斑君、試合準備が整いました。

カタパルトより発進してください。方法はわかりますか？』

「大丈夫です。既に何回かやりましたから。」

『分かりました。では、発進タイミングはパイロットに譲渡します。』

一夏は山田先生からの指示に従い、カタパルトに足をつけた。これも何回かやったから慣れたが、足を固定されたまま前に押し出されるのに最初は慣れなくて苦労したのはいい思い出だ。

「織斑一夏、悪人出るぞ」

腕部と脚部のみの特殊なＩＳだが、その重さは通常ＩＳの二機分の重量を誇る。開示されてない一夏の視界にだけ表示される機体資料にそれは乗っている。これはＩＳ委員会側の悪戯でもある。

カッチン鋼を使う上で一番重要なのはその重さであり、ＩＳのパワーアシストでも紛らわす事が出来ない程の重量であり、本来カッチン鋼は装甲材質としてはほんの少し入れれば良い。しかし、この悪人は装甲にカッチン鋼をこれでもかと使ったのである。その為、見た目以上に重過ぎてパワーアシストを使ったとしてもパイロットに甚大な疲労を与えるので短時間のみの戦闘になってしまう。一般搭乗者では1分、熟練搭乗者でも5分程しかまともに動かす事が出来ない。

これはＩＳ学園側に提供した資料に載ってないため千冬達教師陣は一夏の悪人がどれ程の劣悪品である事を理解していなかったし、一般的にカッチン鋼は使っても材質の数％程度の為にたとえ使ったとしても大丈夫だろうと言う気持ちがあったのだ。

その超絶的な重さの為……　メコォという音が鳴る。

『重量オーバーです』

カタパルトに足を乗せても重量オーバーの表記と共に発進が止まってしまう。一夏本人は『全く問題ない』のだが、こういった機械類は耐えきれず駄目だったようだ。

「……　しょうがない。山田先生、このまま出ます。」

一夏はそう言ってＩＳのＰＩＣと舞空術を合わせてその場にふわりと浮き上がり、アリーナの中に飛翔した。しかし、その飛翔した速度は瞬間的に音速まで上がったのである。その結果、一瞬でアリーナ内にて滞空していたオルコットの目前まで移動し、そこから一夏は９０度、つまり直角に下方向へ曲がり地面に着地した。余りの勢いのためかアリーナが少し揺れ、砂煙と地面が割れる。

「オルコット、貴様を血祭りにあげにきたぞ」

その目でＩＳと呼ぶにはあまりにも相応しくないモノを、見てオルコットは「その様な機体で出来るとでも?」と言ってからさらに言い放つ。

「チャンスをあげますわ」
「チャンスだと？」
「貴方のそのＩＳでは私には勝てるはずがありません。いくら貴方が強いだろうと、ＩＳにおいては初心者の中の初心者……　動かすので精一杯でしょう？
　このまま惨たらしい敗北をさせないようにする為の私からの優しい降伏勧告ですわ。」

　上からそう言い放つオルコット、それを聞いた一夏は「それもそうか」と言ってオルコットは「やはりこの男も……」と考えた――――その時だ。
　コンマ０．１程の時間で一夏は小さな気弾を作り上げ、それをアリーナ中に撒き散らし、アリーナに激震が走る。試合開始の合図は既に鳴っている。故にこれは反則では無いので、オルコットは虚をつかれた行動に呆然とする。　それに丁寧にオルコットにはなんにも影響がないようにして、それに気付いたので何も言えない。

「侮るなよ小娘――――そのちっぽけなお前を血祭りに上げてやる！」

一夏は全力で地面を蹴った。

◆

一夏はアリーナに展開されているシールドバリアを足場に、ＩＳには考えられない異常とも呼べる動きでオルコットに牙を向いた。跳躍とＩＳのＰＩＣによる滞空、それに加えた舞空術による完全不規則な動きはアリーナにいる誰もが目を疑った。　オルコットはその人々よりも更に驚愕しており、理由としてはその動きのキレである。その体のこなし、ＩＳの機能の使い方が劇的に上達しているのだ。最初の方はまだ目で捉えていたが、現状ではもう目でギリギリ追えるまでに至っている。

数回動かした――――それは初心者の領域を脱してない者であると証明していた。だが、現実はどうだ？

この何処が初心者だというのだろうか。

「くっ、この……　ちょこまかと！」

オルコットは自らの専用機『ブルー・ティアーズ』の主兵装であるスターライトＭｋ―ＩＩＩで一夏を撃とうとするが、その照準に入る前に既にあらぬ方向にいる為に手出

しが出来ない。

「卑怯ですわよ！
男なら正々堂々勝負するんじゃないですの!?」
「戦いに綺麗も汚いもあるものか。
そぅれッッッ、当ててみろォ！」
「ぐぬぬぬ……　こうなればティアーズ！」

オルコットは特殊兵装『ブルー・ティアーズ』を展開する。その腰部の四枚の青い板が一夏に向かう。
第三世代型ＩＳ『ブルー・ティアーズ』
英国のティアーズ型の発展機にして、搭乗者の思考で稼働させる兵装操作技術『イメージ・インター・フェイス』を採用し、無線操作型射撃兵装『ブルー・ティアーズ』搭載の試験機である。オルコットが持つのは1から3号機まである内の1号機。
無線兵装であるブルーティアーズを操る為のＢＴ適正値が英国の中でも一番高い為に選ばれた。言わばオルコットはエリートなのであるのだが、その根は努力家であるので実力もある故に『エリート・努力家・美少女』三つを揃えている彼女は国内での評判

は良い。そうしてオルコットは英国の代表候補生の中でも首位に経つ程まで上り詰めた。

　このブルーティアーズは複数の砲台による同時攻撃が可能であり、時間差・収束射撃……　理論上は湾曲射撃も可能である。

　英国代表候補生セシリア・オルコットと言えば、次世代の中でも、また世界からも注目されている新星の一人……　だがその相手が悪かった。

「落ちろカトンボ！」

　放出された４基のティアーズの内２つは一夏の手から放たれた光弾によりすぐ様撃ち払われる。光弾はティアーズを撃ち払った勢いのままアリーナのバリアに接触し、激しいスパークと共に爆発した。それでもズズンとアリーナが揺れ、その威力の高さを物語っていた。　オルコットは一夏の手から出る光弾が、ＩＳの武装ではないことを見抜いた……　しかしそれならばあの光弾は何なのか？そう考えた所で思考を切り替える。

「（彼は……　あの男は強いッ）

認めましょう。貴方は強い……　だから認識を改めますわ。貴方は――――全力を持って倒すべき敵です！」

一夏はここで最初の奇襲から続いていたオルコットの気の乱れが落ち着き、気配が変わったのを察知した。体から無駄な固さが無くなったオルコットの様子に戦況が変わると予想する。

その予想はすぐに当たることとなった。オルコットは2基のティアーズを回収し、スターライトＭｋ――ＩＩＩによる射撃を行う。それまで淡々と撃つものではなかった。

「踊りなさい！私が奏でるワルツで！」

「ぬう!?」

突然の連射に一夏は思わず避けるが、避けた場所に丁度のタイミングでレーザーが襲った。予想外の事に防御が遅れてモロに直撃し、ＳＥがこの試合で初めて大幅に削られた。

――――ほう?面白い事になってきたなァ

「ちぃっ!?」
「まだ行きますわよ……　ついてこれますか!」

一夏にとって初めて見るその攻撃に戸惑いを隠せない。行動を起こそうとした一夏だが既にオルコットは一夏に向けてスターライトを向け、その銃口からは光が放たれ一夏に殺到していた。　今度は気弾を放ち打ち砕いたが、爆炎による煙でオルコットの姿が見えなくなる。気でオルコットが居ることは感知出来るが、そのまま突撃しても狙撃される可能性があることを理解しているがこのままでは埒が明かない事も理解している。その上で一夏は突撃という手段を決行。

（奴の弱点は先程の行動で分かるが、今はまだＩＳに慣れてない分下手に攻めてもダメだな……）
「まだワルツは終わっておりませんわよ!」
「ぬあっ!?」

煙を突き抜け殺到するレーザーを腕あてで防ぎきった瞬間に、脚部を狙撃されていた。この時、初めて訪れたチャンスにオルコットはブルーティアーズ４基を稼働させ、

さらにスターライトＭｋ―ＩＩＩで持てる技全てを掛けて畳み掛けた。

――――一夏、ＩＳのＳＥとやらが枯渇しかけているぞ

「ヘアッ!?」

「強くてもやはり初心者。私のようにＩＳでの戦闘経験がある者ならまずならない、初心者（ルーキー）特有の失敗ですわよ！」

オルコットの相手は世界唯一の男性ＩＳ操縦者、そして世界最強の唯一の家族である織斑一夏。

ＩＳを動かしたのは数回・・・・・　それだけならオルコットにすぐ様負けるのは誰もが思う事だ。今回の様な事は稀にあるが、殆どは最後にＳＥの確認不足という初心者にある失敗による敗北は多々ある。それは今回も当てはまる。普通ならこの状況を覆す事はもはや不可能とも呼べるのだが、一夏にはこれを覆す要因があった。

『戦闘民族サイヤ人』

生きる＝戦闘である彼らサイヤ人。その中でも伝説の超サイヤ人であるブロリーの細胞をその身に宿し、尚且つ改造された人間である織斑一夏の戦闘力はまさに化け物だったのだ。

織斑一夏が元々有していた戦闘における驚異的な成長速度に、サイヤ人の戦闘特化された能力と戦いながら進化する能力も加わったのだ。それはもう１×１＝１０００とも呼べる程に少しの情報で莫大な戦闘経験を得て超速度の成長を果たすのだ。ここまで得た情報と、実際に受けて体を動かした一夏は直感的に理解する。最大火力が来ると

「お行きなさい！」

滞空しているティアーズ２基に加え、先程回収したティアーズ２基を再発進させレーザーを連続発射させる。さらに腰部にあるティアーズ実弾搭載２基からミサイルを発射した。レーザーに至っては一夏を囲うように撃たれ、例えそれを突破しようが次に追尾性のあるミサイル二つが一夏を襲う。それを打ち破っても最後にオルコットのスターライトＭｋ―ＩＩＩによる狙撃が待ちかねている。

「改めて言いますが、貴方は強いですわ……　その戦闘における能力は私より遥かに高い。だからこそ、貴方に謝ります……　そして私の全力を謝罪代わりにさせて頂きます！」

誰もがこれを見て一夏の敗北を察した。普通なら第一膜のレーザーの雨で大体のＩＳパイロットは落ちるか、大ダメージを負う。これがオルコットが持つ奥手の技にして必殺技とも呼べる戦法……　その名は

「青の雫――――ブルーティアーズッ！」

オルコットは自らの能力をフル活用し、確実に相手を落とす方法で早期決戦を決めたのだ。この戦法こそ今の彼女における瞬間的最大火力であり、今まで多くの敵対した者達を倒して来た一撃である。

そう、それは今までは――――という話である。レーザーの雨に囲われた一夏は大声で叫ぶ。

「この程度で俺を倒す事など……　出来ぬぅ！」

オルコットはハイパーセンサーによって一夏の体の周りに緑色の光の幕のようなものが浮かび上がったのを目撃したのと、その一夏から膨大な熱源反応を確認したのであ

る。次の瞬間ティアーズ全機の反応がロスト、オルコットは強大な圧を感じ、気付いたら地面に叩きつけられていた。

「かっ……　ぁっ……　!?」

アリーナにて見ていた者達はオルコットの一撃の後、爆発が『２回』起きたと感じたらいつの間にか地面に叩きつけられていたオルコットと、それに対して無傷の一夏……　さらにひび割れが起きているアリーナのシールドに騒ぎ出した。

「くっ、うぅ。
これはエネルギーを纏った衝撃波ですの?」

オルコットはアリーナの戦闘エリア内に充満する高密度のエネルギーを感知し、そこから今の謎の衝撃とティアーズ全機ロストから考えた結果がそれだった。　後に一夏から言われるがこれは高密度に集めた気を衝撃波として放つ『超衝撃爆波』と呼ばれる技である。

「今の攻撃……　流石と褒めたい所だァ！」

アリーナにて試合を見ていた者達は目を疑った。

地上にいるオルコットに向かってゆっくりと降りて来る一夏。その一夏が近付くにつれてアリーナの攻撃によって砕かれた地面が浮び上がり、しまいにはアリーナのシールド天井部が自然に壊れたのである。

これが、ただ一人の人間により起こった事なのか？――――――オルコットはそう思う。

「ば、化け物……！」

「俺が化け物？

違う、俺は悪魔だァ」

自然に一夏は意図せず超サイヤ人に変身し、その身から溢れ出す闘気・殺意は増大し、気のフレアが放たれた。それに気付いて一夏は笑い出した。

「ヘアハハハ！

よもや俺にこの姿を引きずり出させるとは、貴様はＩＳにおいては強いと褒めてや

る。そこの所はな。」

一夏のその表情は逆光の影響で見えないが、輝くその金色の髪と溢れ出る緑と金が混じったフレアが恐ろしい戦士にオルコットは一夏の言葉通り悪魔に見えた。　一夏から見たオルコットの顔は怯えが現れており、恐ろしい何かを見ているかのようだ。

「試合を終わらせてやる。なに、長い苦しみ等は無い。

今――――楽にしてやる」

やけに透き通る声で一夏はそう言い、続けて右腕を上に掲げる。その行動にオルコットは疑問を抱いたがすぐ様それが何を起こすのかを生物的本能にて理解し、すぐ様スターライトＭｋ―ＩＩＩによる射撃を開始する。

「なに、あれ……」

誰かが言ったその言葉はこの場にいる全ての人間の感想である。一夏の掲げた右手……　その掌底部分に緑色に光るナニカが集まっているのだ。

所変わってアリーナの管制室では千冬と山田先生がこの現象を急いで調査していた。

「織斑君の手から超高密度エネルギー反応を確認！

まだエネルギー反応が増大してる!?」

「やめろ織斑！

止めるんだ織斑！やめろぉぉぉぉ！」

管制室はある意味パニック状態である。

一夏から膨大なエネルギー反応が確認され、それがオルコットを一撃で消滅させることも出来、なおかつＩＳ学園ごと消滅させることが可能な反応であるからだ。千冬に至っては開放回線を最大にして叫んでるので、アリーナ中に聞こえていた。

『今――――楽にしてやる』

教師二人はその声を聞いた瞬間、気温が下がった様な感覚を覚えた。千冬はそれが純

粋な殺意である事を理解し、さらに叫ぶ。

「織斑一夏ッッッ！
貴様はオルコットを殺すつもりか!?」

「ふっふっふっ……　はっはっはっ！」

オルコットの射撃が一夏に直撃する。だがその体に当たる前に一夏の周りにある光の膜に阻まれ四散する。

光は既に極光とも呼べる程にまで膨大で増大し、アリーナのバリア内は世紀末とも呼べるほどに荒れた大地に緊迫した空気を漂わせていた。そして、遂にそれは出来上がった。

「見るがいい」

オルコットから見た一夏の手の平には、ビー玉程の大きさをした光球が確認出来た。そして、ＩＳを通して見る視界にはその光球から異常と呼べる程のエネルギー反応が検出されている。

「名を――――ギガンティック・レイ」

一夏が考案し、ブロリーがかつて放った超絶的で究極の一撃を参考に作り上げた一撃。光球を一夏は細長く、先端を尖らせた槍の如き形状に変える。

「命乞いの準備は出来たか
恐怖に怯え死ぬ準備は出来たか
俺は倒せず敗北することを理解したか

貴様はこれでも折れずに、まだ俺に勝とうなどと思っているのか？」

一夏の眼前にいるオルコットはそれでも、まだ一夏に対して射撃を繰り出していた。その目には未だに戦う意志が宿っており、一夏を睨みつけている。

「それでも、と私は言います。
貴方にたとえ勝てなくとも、私は最後までやらさせていただきます！」

オルコットはスターライトＭｋ―ＩＩＩの射撃設定を即座に弄り、収束照射射撃状態に変更しありったけのＳＥを注ぎ込み撃ち放つ。
一夏はその姿勢、その闘志に対し面白い奴だと考えた。

「ふんっ！」

それに対して一夏は軽くギガンティック・レイを撃ち放つ。投げ方としてはティッシュをゴミ箱に投げ入れるのと同じ要領であり、本当にゴミを投げ捨てるようなフォームで放ったのだ。
一夏の手から離れたギガンティック・レイは一際強い光を放ち、一直線に、真っ直ぐにオルコット目掛けてゆっくりと突き進む。その姿はまるで宇宙からゆっくりと落ちてくる巨大な隕石のようだ。　それに対してオルコットのスターライトＭｋ―ＩＩＩから放たれた極太レーザーが対峙し、両者は衝突し眩い光が発生した。

「嘘でしょう!?」

スターライトＭｋ―ＩＩＩが押し負けていた。アリーナに居る特定の人物を除いたほぼ全ての人々が、目の前の光景に驚愕していた。

最新鋭の第三世代機の火力が、どう見ても第二世代機より前の旧型世代機に押し負けている光景なぞ誰が想像するか。二次移行か三次移行ならその可能性があるが、まだ一次移行だけの機体に負けるなぞ絶対に思わない。

オルコットの極太レーザーは一夏のギガンティック・レイに対してただただ霧散するのみという結果になり、受け止めるということさえ叶わなかった。

『アリーナのシールドを最大出力にしろ！

緊急用の実体防御壁も展開しろ、早く！』

『シールド出力最大、共に実体防御壁稼働展開します！』

『オルコット！貴様はシールドバリアの展開と、防御に専念しろ！』

管制室にいる教師二人の声が聞こえる。アリーナのシールドは自壊した天井部以外

の部分が、シールドバリアの向こう側にある観客席を覆うように実体防御壁が展開され始める。

教師二人の慌て様に一夏はボリボリと頭をかいてからため息一つついてから言う。

「爆破だァ！」

左手から出した小さな気弾を、ギガンティック・レイに向けて投げた。教師二人はこれを見て完全にオルコットを殺るのだと「もうダメだ…おしまいだぁ…」と考えて、次の瞬間には死ぬのだと覚悟したオルコットは目を閉じた。

ギガンティック・レイに気弾が衝突した瞬間、天井部の空いた所から衝撃が天に昇った。アリーナの地面全体がクレーターのように凹み、バリアは罅が入り、オルコットは『アリーナの壁面に出現した岩盤』にめり込んでいた。観客席の方は防御壁が少しだけ開いてる状態で爆発が起きたが幸いに影響は無かった。

それに対して一夏はヘアハハハ！と盛大に笑い上げ、超サイヤ人を解いて地面に降りてから言った。

「誰が殺すと言った。

俺は確かに血祭りに上げてやるとは言ったが、その意味は奴の『下らぬ思想の破壊』……　現状のオルコットの思考を血祭りに上げるのが俺の目的だァ」

「ほう？そういう割には酷く凄まじい状況になったが？」

いつの間にか背後に居た千冬が　そう怒気を含んで言う。それを一夏は簡単に受け流して言う。

「だいたいだな……　学生、教師、街、国――――俺にとってそれぐらいなら片手間で俺は破壊し尽くす事が出来ると断言出来る。

そもそも俺からすればＩＳなんていう拘束具越しに殺るのは好きじゃあない。」

ＩＳ越しで人を殺す――――それだけでこの世界では重要な役割を持つＩＳの最強の防御性を覆す事になる。それは世界において新たな火種の元になるかもしれないのだ。一夏の言葉を聞いた千冬はそれらを考慮してるのだからこれぐらいで済ませてやるとか？……　そう思った。

「……　教師として、家族として私は貴様に殺しはさせんし、させない。少なくとも学

園にいる間だけは絶対にな。」
「ふん。まあせいぜい頑張るんだな。」

一夏はそう言って歩む速度を上げた。それに対して千冬はその場に立ち止まり、管制室との通信用の小型インカムで管制室の山田先生へと繋げる。

「山田先生、試合終了の宣言だ。」
『オルコットさんのブルーティアーズＳＥエンプティ。
試合は織斑君の勝利です。』

一夏は岩盤の前まで歩み寄り、オルコットの前に立った。すると突如岩盤が消え去りオルコットが地面に向かって落ちる。一夏はその丸太の様な腕で落ちてくる気絶してるのか何もアクションを起こさないオルコットをキャッチ……　すると展開されたブルーティアーズが光ったと思ったら消える。どうやら搭乗者を守り切り、完全に力尽きたのだろう。

「んっ……「目覚めたか」……　きゃあ!?」

「ぬう!?そこまで驚かんでも良いだろうに」

普通目覚めたら悪魔のような男に抱えられてたら驚くに決まって……（ポーヒー）……　ウワァァァァァァ!?

「私は負けましたの？」

「その通りだ。最初から慢心も油断もせず、直ぐに俺を倒せていればこんな事にはならなかったんだろうがな。」

一夏はオルコットから伝わる気から、試合途中まであった慢心と傲慢さが消え失せていた事を認識した。オルコットは一夏からの言葉で意気消沈しつつも呟いた。

「その通り、です。これは私の慢心と油断が原因ですわ。それに貴方を男であるという理由で見下して居たから、女である私の方が強いと思っていたからですわ。

だからこそ、一週間前のあの日もあの様な行為をしてしまったのでしょう……　貴方の言葉通りでした。」

「ほう?あの時の言葉を漸く理解したのかァ

貴様の様に、今の世の女尊男卑思考に染まった女達はそうやって元の良さを、冷静さを男が居るだけ――――という理由に失っている。」
「はい。そして、私にはこの後やらねばならない事が出来ましたわ。」
「……　そこまで分かってるのであれば俺からは何も言わん。これ以上クラスでの立場を悪くしたくなければ、これからの行動を考えるのだな」

そんな言葉を言った時に一夏は気付いた。今のオルコットを抱えている体勢……言わいるお姫様抱っこということに、オルコットは気づいているのか？と。　そう考えもう一度オルコットを見るが落ち込み過ぎてそれすら考えてない模様。　すると管制室から通信が入った。

『織斑。オルコットに動けるか聞いてみろ』
「オルコット、貴様歩けそうか？」
「……　少し厳しいですわ。」
『やはりか。あんな馬鹿げた攻撃を喰らえば誰でもこうなるか……　よし、織斑はそのままオルコットをBピットまで運べ。既に山田先生が待機している。』
「（了解だ。）」

こうして後にクラス代表決定戦と呼ばれる織斑一夏のＩＳにおける最初の戦いは幕を下ろした。

『織斑一夏はこの後アリーナの整備をしろ』
「へアッ!?」
『貴様のせいでアリーナの壁はボロボロ、シールドバリアは展開機器自体が故障……せめて地面ぐらいは整備しろ馬鹿者!』
「ぬぅぅぅ!?馬鹿なアァァァ!」

暴れた結果この始末☆
さてさて、この先どうなることやら

伝説の超日本人一夏君１０話

クラス代表決定戦が終わったその日の深夜。
私こと織斑千冬は愚弟のやらかしの後始末を終え、無事に寮の部屋に戻って来ていた。

「全く……　一夏の奴、暴れに暴れおって。
破損機器報告の書類をどれだけ書かせるつもりだ……　はぁ。」

深夜とは言え疲れたものは疲れたのだ。こういう時は一杯やって寝てしまいたい。
そうしなくてはストレスを発散する機会というのが中々無いのだ。

「――――ん？」

今の時刻は深夜の１時を回ろうとしている。
その時刻なのに誰かが部屋の前に立っており、気付いた時には誰かが扉をノックして

いた。私は警戒しながら扉に手をかけ……　そのまま意識を刈り取られた。

◆

冷たい風が吹いていた。

目が覚め、周りを見渡す。そこは一夏が寮の部屋に物理的に入れなかった為、テントを張って寝泊まりしている屋上だった。

今日は三日月のようで、月光を背に上半身裸の一夏が私に背を向けてる。背中ごしだが一夏から妙な気配が漂っていた。

「目が覚めたかァ」

こちら向いた一夏の目は緑色に輝いており、その漂う気配も完全に一夏とは別のものと変貌した。

「貴様は誰だ…　！」

「オレはこの織斑一夏の身体に埋め込まれた男だァ！

今回は一夏には内緒でな。こうして話す機会を無理矢理作らせて貰ったぞ。」

一夏から報告があった違法研究所で施された改造手術の絡みか。口ぶりからして一夏とはかなり仲のいいものだと思われる。……　だが、私にとってはこうして話す事は初めてだ。故に油断が出来ない。

「名はなんだ?」

「俺の名はブロリー。かつてこことは違う宇宙にて『南の銀河』を破壊尽くした伝説の超サイヤ人だ。」

名前とついでと言わんばかりにボディーブローを決めてきた。

こことは違う宇宙?『南の銀河』を破壊尽くした?それに伝説の超サイヤ人?

「訳が分からん!!なんなんだ、貴様は私を馬鹿にしてるのか!?」

私の絶叫に近い叫びを目の前の一夏……　ブロリーは無愛想な表情で「信じないならそれでいい。」と言って1連の単語について説明した。

戦闘民族サイヤ人、南の銀河という4つの銀河の内の一つを破壊尽くしたこと。

「普通そんな話されても信じられるか……」

ＳＦじみた話だ。これは束の奴が聞いたら飛びつくような話だろうに……

そうしてブロリーは私が知らない数年に渡る一夏の改造手術の一連のことについて話した。私という存在のせいで誘拐され、この星に落下したブロリーの身体を使用して地球人とサイヤ人の強制融合体として改造されたことを。そして、それらが私を越えるために行われていたという事を。一夏から話は聞いていたが、やはり殺意を覚えるしかない。改造を施した奴らも、己に対しても。

「時間が無い。俺も何時までもこの体を操れるわけじゃないから話を進めるぞ。」

そうしてブロリーは見慣れた緑髪白目、それに２ｍを優に超える巨体へと変身した。

「やはりこの姿の方が落ち着くな……　そんなことはどうでもいいか。

今回オレがこうして出てきた目的は一つ。

今日の試合が終わる直前この星の近く、地球人達が呼ぶ名で言うなら……『木星』

と呼ばれる星か。木星付近で俺には遠く及ばないが強大な気を持った者が出現した。気の感じからして恐らくオレがいた世界から来たのだろう。」

千冬はその言葉を聞いてなんだと?と言ってしまった。それもしょうがない。なにせブロリーの様な強い者がいる世界から強い奴がこちらの世界にやって来たと聞いたら、驚かない方が有り得ない。

「このオレ程では無いが、この星の住民にとって星の存亡を掛けるほどの敵だ。ＩＳとやらで叶う敵ではない。」

千冬はやはりそうかと思った。

ブロリーの世界と聞いたからには人外魔境がさ迷う異常世界、世界としての強さとしてのレベルが違うのだ。こちらとは。

「もう既に少しずつだがこの星に向けて動き始めている。

速度的に言うなら……　確か臨海学校とやらがあるそうだが、その辺りには地球近辺にまで来るだろう。最低でも貴様レベルの人間が必要だ。最高でも貴様の数十倍は

欲しいところだなァ」

「あと、三ヶ月程で迎え撃つ準備をせねばならんのか……!!しかも、最低でも私レベルとは!!」

世界最強。その字の如く千冬はＩＳでも、生身でも世界最強である。この世界でも強い者はいる。だが、最低でも千冬と同等か少し上、上限が今の千冬の数十倍。

「駄目だ……　思い浮かぶやつが居ない……　！」

裏の社会にもある程度立場の関係で知識はあり、様々な分野で強い強者の存在は知っている。だが、総合的に強い者は限りなくゼロに近い。

裏の社会の人間達はあくまで武器や暗殺といった特殊な分野で強いが、ブロリーのような強力な人間に必要な真正面から打ち勝つスキルを持つような人間は極わずか。その上裏の社会にも通用する千冬級の強さを持つ人間というのはさらに減って、片手で数え切れるだけの人数だ。その人数になっても上限にたどり着く人間はいなかった。

十年前までなら話は変わっただろうが、ＩＳが出て来てから裏の社会でも悪影響が出ている。暗殺は流石に人間の方が勝つが、それ以外の裏の社会での仕事はＩＳが担って

しまった。その結果裏の社会から次々に去っていくもの達が増加し、僅か十年という期間で裏の社会の人間は3分の2程にまで減少した。一時的にではない。完全引退だ。

「一夏に頼ろうとしても今はまだ無駄だと思うぞ」

「なに？」

「アイツは今無意識下でこの星の者共を選別している。助けるか否かという事をなァ」

そこで千冬は思い出す。一夏が日頃から言ってることを。一夏は今、この世界の現状に対して嫌気が差し尚且つ失望している。それに加え、殺意もとい怒りを覚えている。

『この世界だからこそ』、一夏は……」

「そうだ。一夏はもう既に大体のことに関しては選別し、見限っている。精々守るとしても親しかったもの達だけだろう。

一夏の記憶の中にいた『タバネ』とやらと同じようになァ」

タバネ、私の親友にて『天災』と称されるＩＳ開発者たる篠ノ之束だ。束も一夏同様に世界を嫌い、憎み、親しい者以外はどうなってもどうでもいいと考えている。原因は

どちらもこの世界だ。

『世界がどうなろうと知った事か。
大切な者だけ守ればそれ以外はどうでもいい。
俺／私だけでどうにでもなるから』

一夏と束は仲がいい。一夏は知らないが束は一夏の事が大好きで、ゾッコンもいいところだ。故に、影から日々一夏の支援をしていることは私は知っている。
だから余計に思ってしまう。世界は今詰みに入っている。

「理解したようだな。
なに、一夏の奴は最低でもドイツやこの日本、それにこのＩＳ学園とやらは守る気でいる。」

それはある意味選別した結果でもある。
それ以外の人間には生かす価値が無いと今の所断言してる。

「……　そうか。」
「そう心配するな。やつの戦闘力では精々『フルパワーで都市を一発の気弾で破壊尽くす』程、ただの雑魚だァ！」
「それはお前にとってだろう!?」

　これから来る脅威に対してもはや目の前が暗くなっていく。別次元の宇宙からやってる来る脅威。それがブロリー＆一夏の様な生身での戦闘方法で、一発の気弾で都市を破壊尽くす……　ど　う　し　ろ　と　!?

「恐らく敵はオレの様に空を……　確か音速というのだろう?音速で飛び、フルパワー気弾で都市を一発で破壊尽くす。通常の武器は効かず、ＩＳ程の武器でなら少し位は傷が付くぐらいの耐久性。
　一夏の知識を借りるならＩＳを破壊可能な大型のレールガンとやらならＩＳよりはダメージは稼げるだろう。だが、核兵器とやらではどう足掻いても逃げられるから威力はあっても無駄だなァ」

　ＩＳなら少しだけ攻撃が通る。だが、その前にＩＳごと破壊されるのが目に見えてい

る。だからＩＳでは勝機が無いのだとブロリーは言ったのだと理解する。だが、一つだけなら手は……

「だが、貴様にはとっておきのものがあるだろう？」

「――――――――っ」

ブロリーは千冬の表情を見て確信する。

「オレたちの世界では、気弾という『生命エネルギー弾』を戦いで使うことが多い。貴様が過去に使っていたＩＳとやらが持つ……　確か『単一仕様能力』たる『レイラクビャクヤ』だったかァ？

そのとっておきとやらは、この世界で唯一無二の攻撃性を持つ『対エネルギー武装』なんだろう。」

当たりだった。千冬はとある一件で使えなくなった専用機、白騎士以外で最強を冠する機体の１つ『暮桜』。その後継機を友人たる篠ノ之束と、世界の最高権利者達の許しを得て建造依頼を出した。そうして造られたＩＳを持っている。

「ああそうだ。
　束が考案したＴ（トリプル）コアシステム採用の第５世代ＩＳだ。」
　そう言って千冬は右手をブロリーに向けた。すると一瞬白く輝いた後、その中指に白銀のリングが付けられていた。
「Ｔコアシステム採用第５世代ＩＳ『白式』だ。貴様が言うようにこいつにはコアの関連上『単一仕様能力・零落白夜』が搭載され、さらに機体性能も文字通り次元が違う。はっきり言うと、貴様らが放つ弱めの気弾程度なら耐えれるし速度もある。火力においても最大稼働時ならどうなるか分からないほどにある。
　普段はこうして光学迷彩と機能封印状態にして、ＩＳ反応を消して誰からも見えないようにしている。」
　ブロリーはそのリングから発せられる気配に「ほう？」と感嘆の声を漏らす。
「成程な。このＩＳならば、もしかしたらの可能性があるかもしれないな。

だが、使い手たる貴様が追い付いていないとはどういう事だ？」

ブロリーは苛立ちを混ぜた声でそう言う。

ブロリーから見てもこれまで見てきたＩＳとは、一線どころか次元が違うＩＳに興味を持った。だが、使い手たる千冬には到底扱える様なものじゃないと判断した。このＩＳは地球人の手には有り余る程の性能がある。

「貴様がこの星の中では最強の部類に入る事は理解している。故にこのＩＳは貴様にしか扱えん様な代物になっているのだろうが、それにしては扱う為の器として熟していない。

そんな状態の貴様がオレたちサイヤ人の様な戦闘をしたところで、機体は良くても５分もしないで貴様が死ぬのみだ！無駄死にだ！

オレはこの体の主たる一夏の事を気に入っているから気にかけているから言わせてもらうが、きたる戦いにおいて勝っても一夏を置いて死んでいくのか貴様!?」

ブロリーにとって家族は父たるパラガスしかいなかった。ベジータ王に瀕死の重体になった幼いブロリーとパラガスは、ブロリーの手により滅びゆくベジータ星から脱出

した。　その結果、幼い頃から唯一無二の仲間で家族のパラガスは大切だった。ベジータ王の復讐のためとはいえ大切にしてくれた、制御装置を付けるまでは優しくしてくれてある程度の自由をくれた親父。

　最終的には制御装置以降の憎しみとサイヤ人の本能に従いパラガスを殺したが、どこまで行っても結局のところ大切な存在だったのだ。生きる術を教えてくれたパラガスは、幼い頃のブロリーにとって失うことは何よりも怖かった。

　ブロリーはだからこそ一夏の記憶を覗いた時、口に出してはいないが姉たる千冬の事を大事にしているその心情に昔の自分を見ているように思え共感したのだ。

　そうした一夏の為に怒るブロリーの姿を見て千冬は安心した。一夏の味方でいてくれてありがとうと。千冬は口を開いた。

「――――分かっているさ。ブロリー、いや……　一夏が連れ去られた第２回モンドグロッソの時から。

　でも、この機体は私一人では到底練習出来ない暴龍でな。私同等かそれ以上の存在でないと訓練にならないのだ。」

　千冬はこの星にとってイレギュラー存在に近い。そもそもの根本的な所が違うのだ

が、それを外していても戦闘力において他を抜き過ぎた。だから白式の訓練に必要な手加減や戦闘相手がいなく、施設の訓練では施設側が壊れて訓練所ではなかった。だからこそぶっつけ本番でやるしかないのだと、その結果死んでしまってもしょうがないのだと諦めていたのだ。

「ならば貴様以上たるこのオレが貴様の訓練につきやってやる！」

即座にそう言い返したブロリーに大し、千冬は面食らう。暴虐武人たるサイヤ人そのものであるブロリーが、まさか自分の為にそこまでするとは……

「勘違いするな。これはあくまで一夏の為だ！

色々あったがこうして生きているのはこの一夏のおかげなのだからな！貴様が死ねば一夏が傷つく。だからこそだ！だから貴様は一夏に感謝するのだな！」

いわいるツンデレというものだ。千冬は自分の抱えていた問題が一つ簡単に無くなった為か、それとも単純に面白かったのか「くくく」と笑う。それを受けてブロリーは慣れないことはするもんでないと、サイヤ人生において初めてやった行動に軽く後悔

している。

「もうオレ以外では貴様しかこの星では頼りになるものは居ないのだろう!?明日からみっちり貴様を鍛えてやる！覚悟するんだな！」

そう言って逃げるようにブロリーはどこかへ飛んでいった。千冬はやらなければならない対策と明日から始まる弟から受ける訓練に対し、やれやれと今まで数々の困難を乗り越えてきた時の様にこう呟いた。

「切り払ってみせるさ。」

そう言った直後、千冬はくしゃみをした。

深夜帯の寒い時間であることを忘れていた千冬は、そそくさと部屋に戻って行ったのであった。

伝説の超日本人一夏君１１話

クラス代表決定戦の次の日の早朝。俺は屋上で寝泊まりしているテントの中で起床し、眠い体を起こしながらアリーナへとテントを出てから飛翔する。

その途中にて、ブロリーから共有された記憶もとい記録をサッと見る。見ると言っても浮かび上がる情景を頭の中で思い浮かばせるみたいなものだ。その内容はブロリーと己の姉とのやり取りだ。

――見たなァ？

「はっきりと。」

――これはオレが引き受けたものだ。貴様が気にすることは無い。貴様の体を借りてオレが徹底的に鍛えるだけだからなァ

「別に構わないさ。ブロリーが千冬ットを気に掛けてくれるだけでも嬉しいものだ。

そして、宇宙からの襲撃者。ブロリーがいた宇宙の奴で、ここからこの星のずっと彼方から強い気が放たれてるのが分かる。」

――そそられるかぁ？

「この星の人間以上の戦闘力はそそられるさ。
けど、気の強さからしてまあブロリーの言う通りだな。俺は反則も反則なやり方で強くなったからあんまり言いたくは無いけど……『興味はあるが気分が高まらない』。それ以上はないな。」

一夏はこう言うのは無理もない。まだ一夏は知らないが一夏自身の出生や改造とサイヤ人の特性に加え、伝説の超サイヤ人としての能力値を本人の意思を無視して行われたのだから。全てはそれらを施した奴らが悪いのだ。

――――オレを宿してる者としてそうでなくちゃあ困る。そうだ。オレとお前に対して奴は遥か格下。普通の状態で恐らく一発で十分な奴に、恐る事も高揚することも無い。だが、サイヤ人としての本能に従って他よりも強い者に興味を持つのはいい事だと言っておこう。

そうこうしている内に第一アリーナへと辿り着く。そこから早朝の監視担当教員へ報告し、悪人を纏ってアリーナ戦闘区域に入る。

一夏は生身の戦闘においては規格外だが、ＩＳ戦闘においてはまだまだ素人である。

先日のオルコットとの試合においてはその部分が特に現れていた。

「生身とほぼ変わらないとて、ＩＳのシールドエネルギーが切れてしまっては勝てることも出来んとは……」

一夏の戦闘センスとサイヤ人の特性で膨大な経験を手に入れたが、動きに関してはまだまだ荒い。その点を振り返り、とりあえず悪人でなら可能とする特殊な移動方法から基礎的な戦闘方法を繰り返し行う。

――――　一夏よ。ＩＳにおいて貴様が大丈夫とて、エネルギーが尽きればそこで戦闘では負けてしまう。

先日の試合では最初は特にそうだったが無駄な動きによるエネルギー消費が激しい。

その言葉を聞いて一夏は思い出す。確かに序盤から終盤までひたすら過剰に動き回り直撃や掠った攻撃含めて１０にも満たないのに結局エネルギー枯渇寸前まで追い込まれている。

「確か瞬時加速、イグニッション・ブーストだったか。あれを使いまくっていたからなァ」

――――貴様は過剰に動き過ぎだ。ＩＳにおいてはいかにエネルギーを消費せずに相手をなぶり殺すかが重視されるのだろう？

「それはそうなんだがなぁ」

――――なら、必要最低限の動きを最高速を保ちながら行えばいいだけの話だ。攻撃は現状のままで構わんだろう。

機動力においては悪人は第一世代とは言え第三世代ＩＳをも超え、堅牢さにおいても実体・光線系においても圧倒的である。しかし、この悪人の弱点はＳＥ量がいたって普通であるという事だ。（一夏以外が使うと全てが弱点になるのだが）

その為、瞬時加速の様なエネルギー消費する特殊加速技術は悪人にとって一番の問題たる事だ。

「いざとなれば反則技もあるからな」

反則技。一夏から言われるそれは舞空術や気弾と言った気に関する特殊な武術だ。それらはシールドエネルギーを使わずにＩＳを飛ばせ、気弾で攻撃出来る。だからこその反則技である。

「一応は拡張領域はスカスカで色々入るんだがなぁ……」

――――確か一夏、記憶を見たが貴様は幼き頃ケンドー？とやらをやっていた様だな。それならば刃物やら鈍器を武器とするのはどうだァ？

一夏は今の身体に似合い扱えるものを考える。

日本刀？最低でも超特大の太刀だが、剣道も辞めてから数年は経っている。だが篠ノ之流剣術の数個の技は覚えているが、今の体でそれを扱えるかは不明。

「……　大剣。それに似た様な物か。」

一夏は訓練を止め、試しに悪人でＩＳ学園の貸し出されている近接武装一覧のデータを表示する。

「バスターブレイド、マスドライバー、ジェット付きブレイド……　なんだこの鉄血武器とやらは？

鉄血メイス、鉄血ソードメイス、ツインメイス、それに超大型メイス。それと……これはヴァルキリアバスターソード、か。これらは入る――――な。」

一覧には他に鉄血ペンチがあるが流石に癖が強すぎるので候補から外した。

話はメタイのだが、ブロリーに鉄血武器を使わせるなんて発想がもはや悪魔である。

因みにこの光景を見ていたとある兎が既に武器の発送をしているのは秘密である。

◆

訓練を終え朝食を終えた後、悪人もとい一夏宛にラビット工業から朝見ていた武器が何故か届けられており、それらを拡張領域にインストールさせてから教室にやって来た。

「むっ。オルコットか」

時間にして最初の授業が終わった後の小休憩。一夏に先日一方的に叩きのめしたオ

ルコットが近付いてきた。その表情は先日の最後と同じく余分なものが落ちたスッキリとしたものだ。
クラスの雰囲気も先日と比べればだいぶ和らいでおり、既にやる事をしたのだろう。
「一夏さんおはようございますですわ。
先日の決闘では本当に申し訳ありませんでした。」
ここで一礼。
そこで一夏は自分の呼び方が変わったことに気付き、フッと笑ってから喋る。
「貴様がやるべき事はやったようだな。」
「はい。織斑先生に許可を得て、ＳＨＲの時間に。」
「ならばもう言うことは無い。これからの学生生活を楽しく過ごすのだなァ」
そうして自分の席に行こうとした時、オルコットから制止の声を聞いた為立ち止まる。

「クラス代表の件はどうなさいますか？
　勝者たる一夏さんには就任権利と辞退権利が有りますが。」
「貴様はやりたいか？」
「前ならやりたいと答えたでしょうが、今はやりたくないと言えますわ。
　一夏さんとの戦いでまだまだ自分が未熟である事を認識し、暫くは訓練に集中したいですから。」
「ククククク……　あれだけ嫌っていた相手にこうも変わらせられると貴様でさえ思いもしなかっただろうな！
　良いだろう。クラス代表、喜んで受けさせてもらう！」

　一夏のクラス代表就任確定によりクラスは沸き立った。そんな中、一夏は自分の席にたどり着いて胡座をかいて浮かび上がる。
「さあお前達！もう授業前だからさっさと席に着くがいい！」

　一年一組クラス代表伝説の超日本人織斑一夏、今ここに爆誕したのである。もうダメだ…おしまいだぁ…

◆

時間は経ち放課後。現在俺は箒とオルコットの二人と共にアリーナに来て訓練と一緒に今朝インストールした武装のチェックをしている。因みに一夏が近接武器を用意したと聞いて頭痛を起こし嫌な予感がすると呟いていた。

「こ、これは……。」

「凶悪な物ばかりですわね。」

アリーナの地面に突き刺さる一夏の武器達を見て二人はそう言う。

「一夏さん。この武装はどうしたのですの？前の戦いでは出していませんでしたよね？」

「ん、あー……　悪人で欲しい近接武器眺めてたら今朝なんかラビット工業って所から届いた。よいしょっと！」

一夏はヴァルキリアバスターソードと呼ばれる超大型の剣を片手で持ち上げる。箒は身に纏う打鉄の武器である近接武器の葵を見てから一夏が握る剣を交互に見て静かに青ざめた。

手に持つヴァルキリアバスターソード以外の武器を収納してから一夏は箒に声をかける。

「よし。武装確認訓練……　箒やるぞぉ！」

「(こ、断りたい！断りたいがそれを私は受け容れられない！一夏からの誘いなんだぞ!?
でも……　ア゛ア゛ア゛ア゛!!!!!!!!!!)
うむ。やるか！(ア゛ア゛ア゛ア゛!!!!!!!!!!!!!)」

(箒さんご愁傷様ですわね。)

とりあえずオルコットは離れた距離から一夏と箒の様子を見る事にした。オルコットから見て一夏の振るうヴァルキリアバスターソードはまさに巨人の大剣であり、通常ＩＳが使うようなものでは無い。それをブンブンと高速で回し、強風が起こる様子は恐怖でしか無い。どっかのＤＧＧの様なその剣回しを見た箒はもはやこれから起きる事を認識して震え上がっている。

「行くぞオオオオ!!!!!!」

覚　悟　完　了　！

決死の覚悟で一夏に葵を構えて突撃。通常のＩＳ専用の日本刀型ブレードである葵と、ＩＳ専用とは言え超大型の規格外サイズたるＶＢソード（ヴァルキリアバスターソード略称）では取り回しの悪さは命取りだ。それが当たり前であると箒は認識しており、懐に入った箒は瞬時に葵で斬りかかる。

ギギギギ……

箒は目を疑った。己は確かに一夏に葵で斬りかかり、その刃はその身に届いた筈だ。なのに……！

「あの状態から刃の側面で防いだ!?」

オルコットが思わず叫ぶ。その斬りかかる速度は代表候補生にも届かんとばかりの

もので、オルコット自身目で追うのでギリギリな程。それをＩＳ以上の大きさを誇る大剣を気が付かないほどの速度で回転させ、その側面で防ぎきったのだ。

「俺の腕力とパワーアシストが有ればこの程度問題無い事が分かった、なァ！」

「くっ!?」

刃の側面を押し、そのまま箒を押し退け追撃に入る。箒の居る距離は一夏が持つ武器本来の適正範囲では無いが、一夏が持つ事により箒との距離５ｍ以内でさえ既に……

「圧倒的質量の驚異を教えてやろう！」

ＶＧソードの刃の側面による薙ぎ払いで箒は強烈な衝撃を受け、強さ故に一瞬意識が飛んだ。箒はすぐ様上へ飛んでからの上段を放つが一夏がＶＧソードを箒に向かって蹴り上げて回避しすぐ様一夏に視線を戻す――しかし、その場にはおらず右手にＶＧソードを左手にソードメイスを持つ一夏が箒より更に上から攻めてきた。

「そんな隙だらけの構えで！」

距離にして３０ｍ。無意識に箒はＩＳにおける特殊機構たる瞬時加速、別名イグニッション・ブーストと呼ばれる方法で再び一夏の懐に入り込む。しかし、そこに待っていたのはＸ字に斬り結ばれた一夏が持つ武器だった。

「ごほっ!?」

「ほうれ持ってけェェェ!!」

加減してるとはいえ何とか葵で防いだ上からの攻撃に箒は地上にまっ逆さまに落ち、両手の武器を収納し超大型メイスを持ち自由落下に任せ、殺ろうと思って――――――――ダメだッ！　そう直感が走る。

「一夏さんそれ以上はいけませんわ!!」

その叫びで加速していた意識が戻り、続けてオルコットのスターライトｍｋＩＩＩからの射撃により攻撃軌道を大きく逸らした。

ガゴォォンン!!　と、箒から大きく逸れた地面に突き刺さる超大型メイス。その余波

で打鉄を纏う箒は大きく飛ばされたがＰＩＣと葵を地面に指す事で、アリーナの壁に激突しないで済んだ。

「――――すまん」

「っっっっっ！」

箒は息が止まった。今の一撃で大きく深いクレーターを作りあげ、その威力を物語る。自由落下に一夏の力が加わっただけでここまでの威力……　この時点でＩＳの絶対防御を貫き通すのは確定だ。

「これは試合では使えんな」

そう言って一夏は超大型メイスを収納し、使用ロックを掛けてからツインメイスを展開――――したが、セシリアが突然開放回線で一夏に対して叫んだ。

「ちょっと一夏さん！今みたいなオーバーキル行為はダメですわよ!?」

「分かってるから安心しロットォォ!!」

箒は凶悪な鈍器を構え突撃してくる一夏に対し、呼吸を整え葵を構える。

「ぬん！」
「ふっ、はぁ！」

箒は一撃二撃と、一撃が必殺級の攻撃をギリギリで逸らし、時には葵の刃で受け流す。
オルコットはその光景を見て驚愕し、そして感嘆の息を漏らす。

「ヘアハハハハ！
なんだ!?箒よ、思ったよりもやるではないか！」
「これッ、でも！篠ノ之流剣道術を納めているのでな！」

激しい乱撃の中、箒は攻撃の隙をついて一夏に対し攻撃を当て、その上で迫り来る攻撃を受け流す。
オルコットは箒の発言でこの動きが東洋の剣術における技術を使用しているのだと理解する。

「成程、篠ノ之流……　確か千冬ロットも似たような動きをしていた。成程――――ならばその仕組み理解した。」
「仕組みを理解した所で、一夏は対処出来ていないだろう！」
「だからこそ、その程度で勝てるとでも思っていたのか？俺がこうして近接武器に慣れるため、この訓練をしているのだと忘れたか？」

素手で戦うのが主なサイヤ人のため得意では無く、そして一夏は近接武器に対しての扱いは小学生以来の為完全に忘れていた。しかし、一夏の成長速度が今近接武器の扱いの認識を思い出し、勝利への道を開いた。
カチリと、認識と経験の歯車が合わさった。
「ぐっ、これは――――!?」

ツインメイスを回転斬りの要領で振るい、その流れでＰＩＣと踏み込みで距離を詰めながらさらにもう一回転。それには箒も捌ききれず後方に大きく吹き飛ばされ、体勢を整えようとした時には既に前方からツインメイスが回転しながら飛んで来ていた。

「うおおおぉ!?」

急上昇して躱したその先に、既に一夏がその手に持つソードメイスを上段の構えで箒に向けて振り下ろしていた。

「篠ノ之流、たしか受け身や逸らしに関する女でも男に勝つ為の技術をメインとしていた。

その捌きによる受け身の技術は大したものだが、俺にはもう通用せん！」

轟ッ！その様な音と共に少女の悲鳴がアリーナで木霊し、その後も激震に襲われ続けたのだった。

「わたしくも豪快な近接武器があった方が良いのでしょうか？」

「これ以上豪快な武器枠は要らない!!!!」

「まだ元気があるみたいだなァ」

「あーーーやめてくれェェエエエ!!!!!!!!!!!!!!」

「一夏！私も混ぜるのです！「ヘアッ!?」ｄｏｏｒ!?」

その混沌とした光景を見ている1人の少女が居た。

「アレは……一夏?」
「あら?貴女転入生の子じゃない。どうしたの?おねーさんが手続き場所に連れてってあげる!」
「え、あ、ちょ!?オーイ!!!!!!!!!!!!!!」

さてさて、次回はどうなることやら。